

特100

610

篇四第書叢ギカア

理心衆群ソルホ

譯郎次又西葛



始



特100
610

編四第書叢ギカア

佛國
文學士
ルボン氏著
葛西又次郎譯
群衆心理
（上）

大正
3. 5. 1.
内交

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや、懐惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轆を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し』との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が菲才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尨大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行するに至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十銭にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。如何に尨大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。依つて以て從來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫の、高價、尨大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんとす。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

(2)

大正三年三月

赤城正藏白

ベルグソンの哲學

目次

目	次
一 緒言	一——四頁
二 生活	五——一五頁
三 持續	一六——三四頁
四 直觀	三五——五七頁
五 創造的進化	五八——九〇頁
六 結論	九一——九四頁
七 著述及關係書目	九五——一〇〇頁

(1)

原 序

本著は専ら群衆の特質を論ずるものである。

遺傳が一人種の各個人に與ふる共通の特質の全體は其の人種の精神を作る。併し是等の個人が或る行動の目的を以て若干集合して群衆を爲す時、此の群衆を観察するに、彼等が集合したと云ふ單純の事實から新たななる心理學的特質を生ずる、此の特質は人種的特質とは別に、時としては之とは非常なる差異がある。

組織されたる群衆は民族の生活に常に重要な役目を演じたが、此の役目が現今程重大なるとは曾てなかつたとである。群衆の無意識的行動が個人の意識的活動に代りたるは現代の主たる特色の一である。

余は群衆に依て提示されたる難問題を純然たる科學的方法詳言すれば意見や理論や教儀の影響を受けず一定の方式を立て、研究するに努めた。是が幾分の

眞理を發見する唯一の方法、殊に今や異論百出の問題を取扱ふ唯一の方法と信ずるからである。一現象を證明するに努むる科學研究者は其の證明が他に損害を及ぼすと否とを願慮する必要がない。有名なる思想家ゴブレー、ダルヴィーラ氏は其の近著に於て余は現今の學派の執れにも屬せざる爲め諸學派の結論に折々反對の意見を懷くとありと言つて居るが、余も本書が同様の批評に値せんとを切望するのである。一學派に屬すると必然に其派の僻見と成見を擁護する事となる。

尙ほ余は讀者に對し余の研究より一見出そうにもなき結論を引き出したること、例令ば群衆は優れたる議會に於ても知識の極端に劣等なるを説きたる後、尙ほ此の劣等なる知識に拘らず群衆の組織に干涉するの危険なるを論じたる理由を一言説明しなければならぬ。

其の理由は斯ふである。歴史の事實を注意して觀察して見ると、社會的有機體は全然他の生物の有機體に劣らざる複雑なる組織を有して居るので、急に之に

深甚なる變化を與へようとしてもそれは人力の及ばない所である事が分る。自然は時として急激なる手段に訴ふることあるも、決して人間の取る様な方法に依らない。是れ理論的には如何なる立派なる改革でも熱狂的大改革より國家に有害なるものがないと言ふとを教ふるものである。若し瞬時にして國民の精神を變化することが出来れば是も有益であらう。併し此の如き力は只時にあるのみである。人間は思想、感情、習慣に支配される、是等は吾人の心髓である。制度と法律は吾人の性格の外部に發表されたもので又其の必要の表現である。性格の結果たる制度法律は此の性格を變更するとは出来ない。

社會現象は民族の間に起るものなれば之を民族の現象と分離して研究することは出来ない。是等の現象は哲學的見地より見れば絶對的價值を有するも、實際に於ては相對的價值を有するのみである。

故に社會的現象を研究するには順次に二個の全く異なりたる方面より考察する必要がある。此の如くすれば純正理論の教ふる所と、實際的理論の教ふる所と

極めて相異なるものある所も知らるゝであらう。此の理論と實際との區別の適用が出来ない事實は殆どない、物理的事實に於ても然りである。絶對的眞理の見地よりすれば、一個の立方體或は圓形は、或る公理に依て嚴重に定義せられたる何時も一樣なる幾何學的形體なるも、吾々の眼に映ずる印象の見地より見れば、是等の幾何學的形體は極めて變つた形狀を呈して居る。配景法に依れば立方體は三角塔又は正方形に變形され、圓形は楕圓又は直線に變じて見える。加之此等の假設的形體を考察するは實際の形體を考察するよりも遙かに重要である。吾等が眼に見、寫眞や繪畫に現像の出来るのは此の假設的形體ばかりであるからである。或る場合には實體の中よりも假體の方に多くの眞理がある。物體を正確なる幾何學的形式を以て表示するは、自然を歪め之をして解す可らざるものと爲すのである。若し或る世界の人民が物體を寫し又は寫眞に撮るとか得るのみにて之に觸るゝとが出来ないと想像すれば、是等の人民が物體の正確なる形體を知るは極めて困難であらう。加之極めて少數の學者に了解し得る形體に關

する知識が一般の興味を惹起すとは殆どないであらう。

社會的現象を研究する哲學者は、該現象が理論并に實際的價值を有すると、及び此の實際的價值のみが、文明の進化に關する限りに於て重要なことを心に銘起せねばならぬ。此の事實を承認すれば、彼は論理學が一見彼に強制するらしく見ゆる結論に關して極めて慎重なる態度を持する様になる。

該哲學者をして慎重なる態度を取るに至らしむるには尙ほ他の動機がある。社會の事實は極めて複雑にして之を全體として捕捉し、各事實相互間の影響を豫想するは不可能である。又時としては此の眼に見える事實の後に幾千の眼に見えざる原因が潜在して居るらしい。眼に見ゆる社會的現象は吾人の解剖の及ばざる至大なる無意識的作用の結果であるらしい。譬へて言へば知覺し得る現象は、吾人の何事も知らざる海底の動亂が海面に現はれ出でたる波濤の如きものである。群衆の行爲の大部分を見るに群衆の智力は著しく劣等であるが、或る他の行爲に於ては、昔人が神と呼び自然と稱し或は天道と名づけ、吾人が縱令

其の本質を無視するも其力を閑却すると能はざる死人の聲と呼ぶ所の不可思議なる勢力に依て指導せらるゝ様に見え、恰も國民の内部に或る潜勢力ありて之を導くが如き様子がある。例令ば言語程複雑に理論的に且つ奇異なるものはないが、群衆の無意識的精神以外何處より此の巧妙なる組織あるものは生れ出でたるか。最も博學なる最も名聲高き文法家も言語を支配する法則を定むる以外何事も爲し得ない。之を創造する如きは全く無能力である。偉人の思想に關してもそが専ら彼等の腦髓の産出なりと言ひ得べきか。斯かる思想は常に個人に依て創造せらるゝは疑なき所なるも、斯かる思想が起る土壤を供給したものは群衆の精神に外ならない。

群衆は疑なく常に無意識であるが、此の無意識が群衆が大勢力を得る秘訣の一つである。自然界に於ては生物は専ら本能に依て支配されて、其の複雑吾人を驚かすの行爲を成す。理性が人間の屬性となりたるは全く近代のとにて、吾人に無意識的行爲の法則を闡明するには尙ほ餘りに不完全である、理性が無意識的

行爲に代るには殊に其の不完全なるを感ぜざるを得ない。吾人の行爲中無意識的に遂行せらるゝもの極めて多く、理性に依て行はるゝものは極めて少数である。

果して然らば若し吾人にして科學的知識に到達し得る、狹隘なるも安全なる範圍内に留まり、漠然たる想像、空虚なる假定の領内に彷徨せざらんと欲せば、吾人は宜しく單に吾人が之に近接し得る現象のみに注意し、専ら其の考察に従事するとである。吾人の觀察より演繹する結論は一般に尙ほ早計である。蓋し明かに吾人の眼に見ゆる現象の裏面に、明かに眼に見えざる他の現象があり、其の又裏面に多分吾人に全く見えざる他の現象があるからである。

凡例

本書は佛國の社會學者ルボン氏の群衆論——民心の研究——を譯したものである、群衆が今日如何なる勢力を得つゝあるかは緒言に明かなる通りである。

本叢書は頁數一定せるが爲め筆端自ら束縛せらるゝ所あり、上下二卷の中に原書全部を譯了するの必要あるより論旨を害せざる限り脚註杯は省略した。尙ほ深く研究されたい方は原書に就て見られたい。併し本文は殆ど逐字譯にしてあるから不十分ながら原意を髣髴し得たると信ずる。

大正三年四月四日

譯者誌す

群衆心理

緒言

群衆の時代

羅馬帝國の没落、阿拉比亞帝國の建設と言ふ如き文明の變轉に先だつ大動亂は一見した所では特に政治的變動、外敵の侵入或は王朝の顛覆に依て決せらるゝ様に見える。併し尙ほ仔細に此等の事件を研究して見ると、此等外見に現はれた原因の背後に眞正の原因あることを示す、此の原因は國民思想の深甚なる變化である様に思はれる。眞の歴史上の動亂は其の壯觀激烈吾人の眼を驚かす如きものでない。文明の改新を結果する唯一の重要な變化は思想觀念及び信條に影響するものである。歴史上の記憶すべき事件は人間思想界に於ける眼に見えざる變化が外部に現はれた結果である。是等の大事件が希有なる理由は一

人種に於て祖先より傳承したる思想の基礎程安定して變動し難きものがないからである。

現代は方に人類の思想が一變せんとしつゝある危のみに屬する時代である。此の變轉の基礎には二個の根本的要素がある。第一は吾人の文明の要素の根帯たる宗教的政治的及び社會的信條の破壊である。第二は近代の科學的工業的發見の結果として全く新奇なる生活狀態と思想狀態との勃興である。

過去の思想は半ば破壊せられたるも尙ほ極めて有力にして、之に代るべき新思想は尙ほ構成の過程中にあるを以て、近世の時代は過渡時代及び無政府時代を現はすものである。

此の必然的に混亂せる時代より他日何物が展開し來るかは容易に言ひ難い。吾人の社會を繼承すべき社會の基礎となるべき思想は如何なる思想なるべきか、是は今日吾人の知る所でない。併し將來の社會が如何なる主義に依て組織せらるゝとも近代の勢力中最後迄殘存せる主權力たる一個の新勢力、即ち群衆の勢

力を度外に置くことの出来ない事は明かなることである。此の勢力は以前は討議の上に超然たるものと見做されたるも今日は既に衰微し又現に衰微しつゝある多くの思想及び引續きての革命に破壊されたる幾多の權力の源泉の廢墟の上に打建てられ將に他の諸勢力を吸収し盡さんとする運命を有て居るらしい。吾人の舊來の信條は悉く動搖し消失し、社會の舊支柱は一個々々倒潰し去るに際し、群衆の勢力は何ものも之を脅威すること能はず、其の勢威着々増進し行く唯一の力である。吾人の懸て入るべき時代は眞に群衆の時代であらう。

一世紀經るか經ざる前には色々の事件を惹起したものは歐洲諸國の傳說的政策及び君主間の競争であつて民衆の意見は殆ど重きを爲さず實際多くの場合には全く度外視されたものであるが、今日に於ては反對に民衆の發言權は非常に優勢となり、君主の行爲を指導するものは民衆の聲であつて、君主は只民意のある所を知らんと努むる丈けである。今日に於ては國民の運命は民衆の心中に決せられ最早君主の會議に於て決せられることはなほ。

庶民階級が政治生活に入りたることは、換言すれば實際庶民が進歩して統治的階級に變じたることは現代過渡時代の最も顯著なる特色の一つである。長い間殆ど何等の勢力のなかつた普通選舉制を採用したことは此の政權移動の顯著なる特色の一の如く思はるゝもそうではない。民衆の權力の増進は初め徐々民心に浸染したる或る思想の傳播に依り、次で理論的觀念の實現に努むる各個人が漸次結合せるに依り起つたものである。群衆が、縱令特に公正ならざるも明白に定義されたる自己の利益に關する思想を獲得し、其力を自覺したるは此の結合に依る。群衆は今やシンデケートを形成し、權力あるものも順次之に屈服して居る。群衆は又労働組合を形成し、凡ての經濟上の法則に支配されず、労働の條件及び賃銀を規正する傾向がある。群衆は政治の實權を有せる議會に代表者を選出す、而して是等代表者は全く自由意志に従て獨立行動を取ること能はず、多くは彼等を選舉した委員會の代辯人たるに過ぎない。

今日は群衆の要求は益明確に言明されて來た。其の要求とは現存社會を全然

破壊して、文明の曙光未だ現はれざる前に人類團集の常態たりし原始的共產主義の世に立歸らしめんとするのである。労働時間の制限、鑛山、鐵道、工場、國有、各種生産物の平等分配、庶民階級の利益の爲め上流階級の打破等皆是れ群衆の要求である。

群衆は推理には殆ど適せざるも之に反し行動は極めて迅速である。而して現今の如き組織を爲したる結果其の勢力は強大侮る可らざるものとなつた。現に新たに發生しつゝある獨斷説は間もなく往時の獨斷説に劣らぬ勢力を得るであらう、換言すれば批評を超越したる專制的勢力を得るであらう。民衆神權説は將に君主神權説に代らんとして居る。

中流社會の歡迎する所となり、彼等狹隘なる思想、稍陳腐なる見解、皮相的懷疑主義、往々過度に走る利己主義を最も能く代表せる文士等は、勃興し來る新勢力を見て愕然として驚き、人心の紊亂動搖と戦はん爲め、曾て輕蔑を加へたる教會の道德的勢力の援助を求めて居る。彼等は吾人に科學の破産を説き、

懺悔して羅馬に歸るべきを説き、天啓教の眞理を回想せしめんと努むるも時既に遅しである。縱令彼等は眞に神の恩寵に觸れたりとするも群衆は此等最近の宗教信者の抱懐せる僻見には餘り關係なきを以て同一の作用が兩者に同一の影響を及ぼすことは出来なかつた。群衆は時に彼等の訓誡者が自分で排撃破壊に努めた神を今日彼等に勸むるも之に歸依するものはない。流れを源泉に還流せしめんとするは人力も神力も及ばざる所である。

科學の破産は曾てなかつた、科學は決して現今の智識界の無政府状態にも又は此の無政府状態の間に發生しつゝある新勢力の形成に就ても何等の關係がない。科學は吾人に眞理を約束した、少くも吾人の智識にて捕捉し得る關係を知らしめんと約束した。決して平和も幸福も約束しなかつた。科學の破壊したる幻影は何ものも之を取返すことが出来ないものであるから、吾人は科學を認めると共に生存せんことを努ねばならぬ。科學は吾人の感情に無頓着にして吾人の悲痛には耳を傾けないのである。

月々の國民間に認め得る普遍的徴候を見るに群衆の勢力が急激に發達せるを示して居る、此の勢力の發達が近い中に止むべしとは想像も及ばない所である。之が爲めに吾人は如何なる運命に遭遇するも吾人は之に服従せねばなるまい。之に反對して如何なる議論を唱へた所で空しき言葉争ひに過ぎない。歐洲文明の最後の舞臺を賑はすものは群衆の權力掌握にて、之に依り常に新社會發生の先驅となる混亂無政府の時代に全然復歸することなしと斷言することは出来ない。併し此の結果は防止し得るであらうか。

古來今日に至る迄朽敗せる文明を全く破壊せるは最も明白なる群衆の事業である。此事は單に今日に始まつた事ではない。歴史の教ふる所に依ると文明の基礎たる道德的勢力が其の力を失つた瞬間より、其の文明の最後の崩壊は野蠻人として知らるゝ無意識にして獷猛なる群衆に依り遂行されて居る。文明は少數の智識的貴族に依り創造され指導されたるものにして決して群衆に依り建設されたものではない。群衆は單に破壊に對して勢力あるのみである。群衆の支

配は必ず野蠻的形相を現はす。文明とは確立せる規則、訓練、本能的状態より合理的状態への移動、將來に對する先見、高度の修養等を含有す。併し是等は皆群衆の爲すが儘に放置せば到底實現の出來ない條件である。群衆の權力は其の性質純然たる破壊力なれば其の行動は恰も朽敗せる若くは死亡せる身體の分解作用を早むる黴菌の如きものである。文明の骨組の腐朽したる時之を倒潰せしむるものは何時でも群衆である。群衆の主要なる使命が最も明白に表示され、暫く數の哲學が唯一の歴史哲學の如く見えることのあるは此の如き時である。

吾人の文明の運命も亦此の如くなるべきか、吾人は其の然るを憂慮すべき理由を有するも未だ之を確言することは出來ない。

兎に角吾人は民衆の支配に身を委ぬべき運命を持つて居る、是れ蓋し先見の明なかりし爲め、群衆を阻止し得べかりし防禦を續々撤去した爲めである。

群衆は今や論議の種となれるも吾人は群衆に就ては未だ些細の智識を有するに過ぎない。心理學の専門家は群衆とは遠く隔離して生活せる爲め常に之を無

視して居た、故に最近に至て眼を此の方面に向くるに至ても群衆の犯罪のみ考察した。疑もなく犯罪的群衆は存在せるも、道徳的義勇的及び其他種々の群衆も亦々吾人の眼に觸るゝ所である。群衆の犯罪は單に群衆心理の特殊なる一部門を爲すに過ぎない。群衆心意の構成は單に其の犯罪を研究して知らるべきでない事は個人心意の構成が其の缺點のみ研究して知らるべきでないと同じ事である。

併し事實に就て見ると世界の英雄豪傑、宗教又は帝國の建設者、諸信仰の使徒、有名なる政治家より下つては人々の小團集の首長に至る迄皆是れ群衆の性質を本能的に時として又精確に知れる無意識的心理學者であつて、彼等が容易に民衆を統御し得たるは此の智識に依るのである。ナポレオンは自己が支配したる國の民衆の特性に對しては實に驚くべき洞察力を有して居たが、他人種の群衆の心理は時として全く誤解したのである。彼が西班牙に於て、殊に露國に於て自家の勢力失墜の原因となりたる戰に従事したるは全く此の民性誤解に

起囚するのである。今日に於ては苟も群衆を支配——此事は極めて困難なる事となりつゝあり——せざるも、せめて甚しく彼等に支配されざらんとする政治家の最後の頼みとする所は群衆の心理に通曉する一事である。

法律制度の群衆に及ぼす影響は如何に微弱なるか、群衆は外より彼等に課せられたる以外の意見を保持するに於て如何に無力なるか、又群衆を指導するは純正なる平等の理論を基礎としたる規則を以てすべきにあらず、群衆に印象を與ふるものは何か、彼等を誘引するものは何なるかを探究して始めて爲し得べきことを知るは幾分群衆心理を諒解せざればなし得ないことである。例令ば茲に一立法者ありて新税を課せんと欲する際理論的に最も正しき税目を選択すべきかと言ふに決して然らず、實際に於て最悪のものが民衆に取て最善のものであり得ることもある、其の税目にして最も目立たず、一見したる所最も負擔輕ければ容易に民衆の容るゝ所となるのである。間接税が縦令非常に重税であつても常に群衆の容るゝ所となるは此の理由あるによる、是れ間接税が日々消費

するものに對して斷片的に納付され群衆の日常の習慣に影響せず人の眼に立たざる爲めである。今若し之に代ふるに一纏めにして支拂ふべき租税を賃銀或は其他の所得に課するとすれば、此の新税は理論上前者よりは十倍も負擔が少くても群衆は異口同音に之に抗議する。是は税額が莫大の額に見え従て想像を刺戟する比較的多い金額が眼に立たざる些細の金額に代へられたる事實より起れるものである。若し少額宛貯へて置くならば此の新税は極めて少額に見えるであらう、併し此の經濟的方法は多大の先見を要すること、先見は民衆の有し得ざる所である。

前記の例は極めて單簡なるものなるも如何なる場合にも適用し得るものである。ナポレオンの如き群衆心理學者には此の如きことも其の注意を脱せざりしが、近世の立法者等は群衆の特性を知らず此間の消息を解することが出来ない、彼等は經驗淺くして人は純理の教ふる所に従て行爲を決定するものにあらざることを未だ知らない。

群衆心理の實際的應用は尙ほ他に幾らもある。群衆心理の智識は之なければ全く諒解することの出来ない多數の歴史的及び經濟的現象に最も明白なる光明を投ずるものである。近世最も著名なる歴史家テーヌが時として佛國大革命の出來事を不完全に諒解してゐるのは彼が群衆心理の研究に思ひ付かなかつた爲めである。此事は後章に於て説き及ぼす筈である。彼が此の複雑なる時代の研究に於て其の指南車と爲したるは博物學者の取りたる記述的方法である。併し博物學者の研究する現象には道德的勢力が殆ど缺けて居る、而かも歴史の眞源泉を作るものは方に此の勢力である。

故に單に實際的方面より見ても群衆心理は研究の價値がある。單に好奇心より結果したるものとしても尙ほ注意を拂ふの價値がある。人間の行爲の動機を研究するは礦物や植物の性質を決定する如く興味の深いものである。吾人の群衆精神の研究は單簡なる綜合概説に過ぎない。此の小著より數個の暗示的意見以上を要求されては困る。一層完全なる研究は之を人に委して吾人は今日只未

だ殆ど未開拓の儘なる土地の表面に接觸したのみである。

第一卷 群衆の心意

第一章 群衆の一般特質。群衆の心意統一

に關する心理學的法則

普通の意味で群衆と言ふは國籍、職業、男女の別、將た其の群集するに至りたる原因を問はず、個人の集合と言ふことであるが、心理學的見地から見れば群衆なる語は之と全く異なる意義を有するのである。或る事情の下に於ては人々の團聚は此の團聚を組成する各個人の特質とは全く異なる新たなる特質を示し、集合に加はれる諸人の感情及び觀念は同一方向に向ひ、其の意識的個人性は全く消滅し、一個の集合心意が形成される、此の集合心意は勿論一時的のものであるが、極めて明白な特質を有する。余は之を組織的群衆又は心理的群衆

と名付けたい。此の群衆は單一なる實在にして群衆の心的統一の法則に支配される。

多数の個人が只偶然に相集りたるのみで組織的群衆となるものでない、何等か一定の目的を有するにあらざれば決して心理學的見地より見たる群衆とはならない。而して斯かる群衆の特質を得るには前以て其の傾向を作る原因の影響が必要である。

意識的個人性の消滅、感情思想の新方向轉回は群衆の將に組織的ならんとする最初の特質であるが、必しも多数の個人が同時に一個所に集合するから生ずるにあらざして、孤立せる幾千の個人が國家の一大事と言ふ如き場合に感情激昂して心理的群衆の特質を有するに至ることがある、斯かる場合には偶然の機會が彼等を集合させさへすれば直ちに群衆の行動に特有の性質を有するに至るのである。或る場合には十二三人で心理的群衆を爲すこともあれば、又時としては何等眼に見ゆる團聚なくして一國民全體が或る勢力の下に群衆となること

がある。

心理的群衆が一度組織されると一時的であるが、併し確定的の一般的特質を得るに至る。此の一般的性質に特殊の性質が加はる。此の特殊の性質は群衆を組織する要素に従て變じ又群衆の心意を變更する。されば心理的群衆は之を分類して異質的群衆即ち不同の要素より成る群衆と同質的群衆即ち各派、各階級と言ふ如き多少相類せる要素より成る群衆と爲すことが出来る。此の兩群衆は共通性質を有すると同時に兩者を區別する特殊性を有して居る。今先づ兩者共通の性質を吟味し次で特殊性を調べて見よう。

群衆の組織は啻に人種及び成分に依て異なるのみならず、又群衆を支配する原因勢力の性質及び強さに依て變はる故、其の心意を正確に記載するは容易の業でない。此の困難は個人を心理學的に研究する場合も同じことである。個人が全生涯を通じて一定不變の性格を有するは小説に見るのみである。性格の一見畫一なるは環境の畫一なるに過ぎない。凡ての心意は突然なる境遇の變化に

依て發現すべき性格の可能性を有して居るものである。是れ最も犖猛なる佛蘭西の議員中に平常ならば最も平和なる市民ありたる所以で、暴風雨一過したる後は彼等は平穩にして法律を遵守する市民の常態に復したのである。ナポレオンは是等市民の中に其の最も柔順なる部下を發見したのである。

茲に各段階の群衆組織を悉く研究するは不可能なれば主として完全なる組織に達した群衆を説き、之に依て群衆の現に如何なるものであるかを見ず群衆の如何なるものになり得べきかを見るべし。或る新たな特質が人種の一定不變の性質に加はり、次で集合體の感情思想が同一方向に轉ずるは此の進歩したる組織に於てのみである。又群衆の心意的統一の心理學的法則が働くのも斯かる事情に於てのみである。

群衆の心理的特性の中には個人と共通のものもあれば又絶対に群衆に特有にして集合體に於てのみ見るものもあるが、吾人は先づ此の特有性を研究すべし。心理的群衆の示す最も顯著なる特性を示せば、群衆を組織する個人は何人な

るも、其の生活方法、其の職業、性質及び智慧が似たるも似ざるも、各個人が群衆に變形されたりとの事實は彼等に一種の集合心意を與へる、此の心意は各個人に孤立の場合と全く異なる思想感情を懷かしめ、行爲を爲さしむるものである。群衆を組織する個人以外には存在せず又變形せざる觀念及び感情がある。心理的群衆は異質的要素より成る一時的の存在である、丁度生活體の細胞が其の複合に依て各個の細胞が單獨に所有せる性質とは全く異なる性質を有する新存在物を形成する如きものである。

ハーバート、スペンサーの言ふ如く群衆を成す集合には決して各要素の總計又は平均があるにあらず、實際存立するものは或る結合を起し之より新性質を創造すること丁度化學に於て二つの元素が相接觸して新たな性質を有する物件を成す如きものである。

群衆を成せる個人と孤立せる個人との相違を示すは容易なるも此の相違の原因を發見するは中々困難である。

兎に角此の原因を瞥見するには先づ近世心理學の發見に係る、無意識的現象は啻に有機的生活に於けるのみならず又睿智の作用に於て極めて重要な働きを爲すとの眞理を心に記する必要がある。心意の意識的生活は無意識的生活に比すれば些細のものである。最も巧妙なる解剖者も、最も精密なる観察者も其の行爲を決定する無意識的動機に就ては極めて少數の發見を爲したるに過ぎない。吾人の意識的行動は主として遺傳的勢力に依て心意の裡に發生したる無意識層の結果である、此の無意識層は代々繼承されたる無數の各人共通の特性である、吾人の行動の明かなる原因の裏には吾人の認めざる秘密原因がある。疑ない所であるが、此の原因の後には尙ほ多數の秘密原因がある。吾人の日常行動の大部分は、吾人の觀察を脱せる隠れたる動機の結果である。

殊に或る人種に屬する各個人が互に相似るは其の人種の時代精神を成せる無意識的要素が相似るに因るものにて、互に相異なるは彼等の性格——教育殊に特別なる遺傳的條件の成果——の意識要素の相違に因るので、睿智が大に差へ

る人々でも極めて類似せる本能、熱情、感情を有する。情操界に屬する凡ての場合——宗教、政治、道德、愛情、反感等——に於ては最も優秀なる人物も最も普通なる個人の標準以上に出づることは殆どない。睿智の點から見ると大數學者と靴工との間には踰へ難き深溝を畫せるも、性格から見ると其の差異は極めて輕微なるか或は殆ど存在しない。

群衆に於て共有財産となるは吾々の意識せざる力に依て支配され、普通人の多數の所有する此の性格の一般性である。集合心意に於ては個人の智的性向は弱められ従て其の個人性も弱められ、異質的のものは同質的のものに覆没されて無意識性質優勢を得るに至る。

群衆は通常の性質を共有するものなりとの事實は、群衆が決して高度の睿智を要する行爲を遂行すること能はざる理由を説明するものである。一般の利害關係を有する事柄に關する決定は、優れたる人士即ち各種職業の専門家の會議に依て決せらるゝが、懦弱者の集會に依て可決せらるべき決定より決して著し

く優るものでない。蓋し彼等は各普通個人の生得權利なる中庸の性質を齎すに過ぎないからである。群衆に於て集めらるゝは天稟の機智にあらず愚鈍である、世界の人が相集ればヴォルテアより多くの機智を有するに至るとは屢聞く所であるが、若し全世界を以て群衆の意とすれば、ヴォルテアこそ却て全世界より多くの機智を有するのである。

若し群集せる個人等が各自の有せる凡庸なる性質を群衆に供するに止らば單に凡衆の平均を得る丈けて吾人の言ふ新性質の創造はない筈である。此の新性質は如何にして創造せらるゝか、今吟味したいのは此である。

孤立せる個人になくして、群衆に特有なる性質の外觀を決定する原因は種々ある、第一は群衆の一部を爲せる個人は單に數量上の考量より打克ち難き力強き感情を懷く、此の感情は彼をして單獨の場合ならば抑制すべき本能を恣にするに至らしむ、殊に群衆は無名氏にして従て無責任なれば、常に個人を拘束する責任は全然消失すとの考より、益々自己を拘束すること少なきに至ることである。

る。

第二の原因は傳染的であるが是も亦群衆の特性發現及び其の傾向を決するに關係がある。傳染の現象は其の現存を決するは容易なるも之を説明するは容易でない。之は催眠的現象の中に分類すべきである。群衆中にありては一切の感情行爲は傳染的で、個人は何時にても其の利益を集合的利益の爲めに犠牲に供せんとするものである。此は個人の性質と相反せるものなるも又個人が群衆の一部を爲す時の外は決して出來ない性質である。

第三の原因は最も重要なもので、群衆中の個人に於て孤立せる個人の示せる性質と全く異なる特性を決定するものである。余は暗示性にも言及するが、上述の傳染は此の暗示性の結果に外ならないのである。

此の現象を了解するには近頃の生理學の發見を記憶せねばならぬ。今日吾人の知る所では種々の過程に依り個人をして全く意識的個人性を失ひ、施術者の暗示に従ひ自己の性格と習慣に全く相反せる行爲を爲さしむることが出来る。

最も細心なる觀察に據るに、或る期間群衆の中に没入したる個人は恰も、催眠術に罹りたる個人が施術者の手に自由にさるゝ如き特別の状態に入る。意識的個人性全く消滅し、意志及び辨別性失はれ、凡ての感情思想は施術者に依て決定されたる方向に向けらる。

心理的群衆の一部分を成す個人の狀態も此通りで、彼は最早自己の行爲を意識しない。催眠に罹つた者と同様に、或る能力が破壊せらるゝ一方に、之と同時に他の能力が非常に高調される。或る暗示を受けると抑え難き性急を以て或る行爲の遂行を企てる。此の性急は被催眠者の場合に於けるよりも群衆の場合の方が尙ほ抑え難いが、之は群衆中の各個人が同様なる暗示を受けるも相互影響に依て力を増すからである。暗示に抵抗するに足る強力なる個人性を有する個人は、群衆中にありて急流を支えるには餘りに少數である。全力を盡した所で異なる暗示を用ゐて方向轉換を試むるのであるが、巧妙なる一言に依り、又は好時期に喚起したる想像に依り、群衆をして最も血に渴したる所爲を止めし

めたるは之に因るのである。

然らば意識的個人性の消滅、無意識的個人性の優勢、暗示及び傳染に依る感情、思想の同一方向轉向、直ちに暗示されたる觀念を行爲に變せんとする傾向、此等は群衆を形成する個人の特性である。彼は最早彼にあらず、自己の意志の指導を受けざる自動人形と成り了したのである。

加之人は組織的群衆の一部分と成つたと言ふ丈の事實で文明の階級を數段下るのである。孤立しては彼は教養ある個人なるも群衆に交はりては蠻人である——即ち本能に依て行動する生物である。彼は原始人の如き自然性、暴力、猛性及び又熱心、勇氣を有する、而して言語や想像に依て動かされ自己の最も明白なる利益及び習慣に反したる行爲を行ひ易き爲め益原始人に似て來る。群衆中の個人は風に簸揚せらるゝ砂中に交れる一粒の砂である。

陪審官が個人としては賛成しない宣告を與ふるは此等の理由があるからで、又議會が議員が個人としては同意を欲せざる法律議案を可決するも之が爲めて

ある。個人々々に就て言へば佛蘭西議會の議員等は開化せる平和の市民なりしも、群衆と成て結合しては彼等は最も野蠻なる提議に同意を與へ、無罪なること最も明白なる個人を斷頭臺に上ぼらしめ、彼等の利益に反して彼等の神聖を棄却し、自らを滅却するを躊躇しなかつたのも之が爲めである。

群衆中の個人が自己と根本的に相違するは其の行爲に依るのみならず。其の獨立を全く失はざる以前に於ても其の思想感情は既に變形し、其の變形は吝嗇者を浪費者と爲し、懷疑家を篤信者と爲し、正直者を犯罪人と爲し、卑怯者を勇者と爲す程深遠なるものである。有名なる一七八九年八月四日の夜貴族が一時の熱心に驅られて可決したる諸特權の廢棄は、若し貴族一人々々に就て問はゞ決して同意しなかつたであらう。

上述の事より引き出さるべき結論は、群衆は智力的には必ず孤立せる個人より劣れるも、感情及び感情に依て惹起されたる行爲の立脚地より見れば、事情に依り個人より劣ることもあり又優ることもありと言ふことである。而して優

るも劣るも凡て群衆の受くる暗示に依て決せられるのである、犯罪人の立脚地よりのみ群衆を研究したるものが全然誤解したるは此點である、成程群衆は犯罪者たることあるも又往々義勇者たることがある。信仰又は思想の勝利の爲め死を冒して進ましむることを得るも、光榮名譽を得んと熱心を以て鼓舞し得るも、又十字軍時代の如く殆ど麩麩も武器もなくして異教者の手より基督の墓を救出さん爲め、或は一七九三年の如く祖國防禦の爲め之を引率し行くことの出来るは孤立せる個人にあらずして群衆である。斯かる義勇は勿論稍無意識的なるも歴史を作るは斯かる義勇である。若し人民に冷靜にしてのみ大功績を建つべしと言はゞ世界の歴史は殆ど何等記録するものがなかつたであらう。

第二章 群衆の感情及び徳性

既に群衆の主たる特性を一般的に示したれば之より稍詳細に述べて見ようと思ふ。

群衆の特性中には刺激を受け易きこと、怒り易きこと、推理不能、判断及び批評的精神の缺乏、感情の誇大其他種々の進化の劣れる生物に必ず見らるゝもの、例令ば婦人小兒に常に見らるゝものあり。併し余は一通り其の類似を示すのみである、其の證明は此著の及ばぬ所である、又證明しても原始人の心理を熟知せる人には必要なく之を知らぬ人には始と信を與へぬであらう。余は之より進で群衆の多數に見らるゝ種々の特性を考察しよう。

第一節 群衆の刺戟性、動搖性、及び短氣

群衆の根本的性質を説きたる時言へる如く、群衆は殆ど専ら無意識的動機に依て指導せらる。群衆の行爲は脳髓よりは寧ろ脊髓に依て動かさる。此點に於て群衆は全く原始人に似て居る。其の行爲は脳髓に依て指導されぬ故個人は自己が服従する作興的原因に従て行爲する。群衆は外界の作興的原因に自由にされ其の不斷の變化を反射し其の受くる刺戟の奴隸である。孤立せる個人も群衆

中に於ける個人の如く作興的原因に服従することをもつても、彼の脳髓は彼に之に従ふの望ましからぬを示す故此等の原因に従はない。此の眞理を心理學的に言へば孤立せる個人は反射的行爲を支配する能力あるも群衆は此の能力を缺くと言ふことが出来る。

群衆の服従する種々の刺戟は、其の作興的原因に據りて或は寛大或は残忍或は勇敢或は卑怯なる等色々なるも、個人の利益又は自己保存の利益と雖ども之を制すること能はざる程専横なるものである。群衆に働く作興的原因此の如く變化多く、群衆も亦常に之に従ふ故群衆は非常に動搖し易い。群衆が血に渴した猛烈より直ちに最も極端なる寛容及び義勇に移るは之が爲めである。群衆は死刑執行人の役を盡し得ると同様にも容易に殉教者の役を盡すことが出来る。信仰の勝利に必要な流血を供給したるは群衆である。群衆が此の方面に於て如何なる事を成し得るかを見ん爲めに過去の英雄時代に溯る必要はない。群衆は叛亂に於て決して生命を惜むものでない。以前或る大將は不意に人氣を得る

様になつたが彼にして要求したら彼の爲めに生命を犠牲に供するもの十萬は容易に發見し得たであらう。

群衆の豫謀と言ふことは問題にならない。群衆は最も相反對せる感覺に於て引續き動かさるゝことあるも常に瞬間の作興的原因の支配を受ける。群衆は疾風に捲き上げられ四方八面に散亂して、又地上に落ち來る枯葉の如きものである。後に至り革命的群衆を研究する時群衆の感情の變動し易き二三の實例を擧げよう。

此の群衆の動搖し易きことが群衆を極めて統御し難きものと爲すので、公權が彼等の手に握られた時は殊にそうである。若し日常生活の必要と言ふものが一種の眼に見えざる生存調節者となつて居るでなければ民主政と云ふものは殆ど永續が出来ないであらう。又群衆の願望は縱令狂熱的でも決して永續するものでない。群衆は或る時間の間繼續して欲求し又思惟することの出来ないものである。

群衆は單に刺戟し易く動搖し易きのみでない。野蠻人の様に其の欲求と、欲求の實現との間に何ものでも入り來ることを許容し得ないのである。彼等の感情は多衆の勢力の爲めに抵抗す可らざる力を得て居る結果、斯かる干涉を諒解することは尙更出来ないのである。群衆中の個人に取ては不可能と言ふ考は消え失せて仕舞ふ。孤立せる一個人は自分一人で宮殿に火を放ち店舗を掠奪することの出来ないことを充分承知して居り、又斯かる誘惑を受けると直ちに此の誘惑に抵抗するであらう。然るに此の一個人が群衆の一部を爲すと、彼は多衆に依て已に與へられたる權力を自覺するので、彼をして直ちに誘惑に陥らしむるには虐殺掠奪と言ふ考を彼に暗示すれば足るのである。茲に豫期しない障害が現はれると狂暴を以て之を破壊し去るだらう。若し人體の組織が怒り狂ふ熱情を永久に容るるものとせば、其の願望の鼻を挫かれたる群衆の常態は正に是れ斯かる熱情の状態であると言ふことが出来よう。

吾人の感情が湧き出る源泉たる人種の根本的特性が群衆の怒り易き、刺戟し

易き及び動搖し易き性質に影響を及ぼすは、凡ての民衆の感情に影響を及ぼすと異なる所がない。群衆は何の群衆でも皆必ず怒り易く刺戟し易きものであるが其の程度には大なる差異がある。例令ば羅典人種とアングロサクソン人種との群衆の間に於ける差異は著しいものである。佛蘭西歴史に於ける最近の例は此點に一道の光明を投ずるものである。二十五年前には或る大使が侮辱を蒙むりたりとの一片の電報を公表したばかりで民衆の憤心を煽ぎ立つるに足り、之より直ちに慘憺たる戦亂を惹起することが出来たのである。其後數年にして佛領印度ラングソンに於ける些細の失敗を電報で發表したるより新たなる爆發を起し、直ちに政府の顛覆を齎らしたのであるが、カルツームに於ける英國遠征軍は之よりも遙かに重大なる失敗に逢ひたるも、英國に於ては僅かに人民の感情を激したるのみにて政府の顛覆はなかつた。群衆は何處でも女性的であるが羅典人の群衆は最も女性的である。羅典人の群衆を信任するものは何人と雖ども直ちに最上の運命に到達するも、之と同時に又危険極まる斷崖を渡り行くも

ので何日か必ず九谷の下に墜落するのである。

第二節 群衆の暗示性及び輕信性

群衆は原則として期待的注意の状態に居るので非常に暗示を受け易い。最初起つた暗示は傳染に依て直ちに集合したる全員の頭腦の中に植附けられ、群衆の感情は直ちに同一方向に趨る。

暗示を受けたるものは皆然りであるが群衆の場合に於ても腦髓に入り込みたる思想は形を變じて行動となる傾がある。其の行爲が宮殿に火を放つ事でも、將た又自己を犠牲に供する事でも群衆は極めて容易に之に赴くのである。群衆の行方は凡て其の作興的原因の性質に依るもので、孤立せる個人の場合の如く暗示せられたる行爲と、其の行爲を非とする理由との間に存在する關係を計量して定まるものでない。

故に群衆は絶えず無意識の境域に彷徨し、直ちに凡ての暗示に盲從し、理性

の力に訴ふること能はざる人に特有なる激烈なる感情を有し、批判的能力を全く缺けるを以て過度に輕信的となるは免れざる所で、群衆に取ては實らしからぬと言ふことは思ひ及ばぬ事である。最も信じ難き妄誕無稽の傳説話柄が手輕く創造され傳播せらるゝ理由を了解せんとせば此等の事情を心に銘記して置く必要がある。

斯くも容易に群衆の中に傳播せらるゝ傳説の創造は、單に群衆の極端なる輕信性に因るのみにあらずして、事件が群衆の想像に逢て異常なる變形を受くる結果にも因る。最も單簡なる出來事でも、一度群衆の觀察の下に來ると直ちに全然變形するのである。群衆は一の假象を輕信すると、此の假象が最初のものと同等論理的連絡なき他の幾多の假象を喚起するのである。吾人は或る事實を心中に思ひ浮べて夫れから夫れへと種々想像を逞ふところがあるが、之を思へば此間の消息を明白にするところ出來る。吾人には理性ありて此等の假象に矛盾あることを知るも、群衆は殆ど此の眞理を知らず、眞正なる事件と事件が彼等の

想像の爲め時形に變じたるものとを混同して居る。群衆は殆ど主觀と客觀の區別が出來ないで自己の心中に思ひ浮べたる假相を眞實として受け容れ、其の假相が觀察したる事實とは極めて遼遠なる關係を有するに過ぎない時でも、平氣で之を眞相と認めるのである。

群衆を組成する個人は皆其の氣質を異にすれば、群衆が其の目撃したる事件を變化する方式も亦無數にして、彼此相同じきものは曾て有るとなかるべしとは、如何にもかくありそうに思はるゝ所なるも事實は然らず、傳染の結果として事實變形の方式は全く同様であつて集合したる各個人には同一の形式を具へて顯はるゝのである。

群衆中の一個人が先づ初めに事實に曲折變化を與へると、之が傳染的暗示の出發點となりて一般に傳はるのである。聖ジョージがエルサレムの城壁の上に於て十字軍の全員の眼に映じたる前には、必ず其中の一人の眼に先づ映じたるに相違なく、暗示と傳染とに依て一個人が表示したる奇蹟は即時諸人の受け容

るゝ所となつたのである。

歴史上往々にして其の實例を見る多數の人士が集合的に一齊に同一の幻影を見ると言ふ事のあるのは、何時でも此の如き仕掛けに依るのである。此の幻影は幾千人の眼界に映せる現象なるが故に、萬人の承認したる的確性を有する如く思はるゝのである。

如上の所論を反駁するには群衆を組成する個人の心的性質を考慮に入れる必要がない。此の心的性質は斯かる場合重要なものでない。個人は群衆の一部分となつた瞬間から學者も無學者も同じく觀察の能力を失ふのである。

此の論斷は奇論の様に見えるが、之を論證するには多數の歴史上の事實を調査する必要あるや言ふ迄もなく、而して此の目的を達するには數卷の書冊を以てするも尙ほ不充分である。

併し余は讀者に證明されざる論斷であるとの印象を與ふるを好まぬ故、無數の實例の中から手當り次第に二三の例を擧げて見よう。

(34)

次の例は群衆が犠牲となる集合的幻影の中より抜き出したるもので、此の幻影中には最も教育あるものも最も無知なるものも含まれ居ることなれば、蓋し最も模型的のものであらう。是は海軍大尉のジュリアン、フェリックスが其著潮流論に於て偶然語り出でたるもので、以前に雑誌科學評論に引用したものである。

其話に據ると帆船軍艦ベルプール號は、大暴風雨の爲め懸け離れたる巡洋艦ルベルソー號探索の爲めに公海を巡航して居た。時は眞晝間で太陽が赫々と輝いて居た。所へ番兵は不意に難波船の信號を示した。乗組員は信號で示された方向を見た、將校も水夫も皆一個の筏に人々が乗つて之を短艇にて曳き、短艇には難波の信號を揚げて居るのを見た。併し是は一個の集合的幻影に過ぎなかつた。デスフォッセ提督は短艇を下して遭難水夫救助に遣はした。接近して見ると短艇の水夫も將校も皆一團の人が手を延ばして動けるを見、多數の聲が低く入亂れて呻吟せるを聞いた。所が愈接近して見ると附近の海岸から流されて來た

35)

葉の茂つた數本の樹枝であつた。此の明かなる證據の前に幻影は消え失せたのである。

此の例の中には曩に説いた集合的幻影の仕掛けが働いて居るのが明白に見える。一方には緊張した期待的注意の状態にある群衆があり、他方には難波船を信號したる番兵が與へたる暗示がある、此の暗示は傳染の過程に依て其處に居た將校水兵の凡てのものに依て受け容れられたのである。

眼前に起りつゝあるものを見る能力が破壊され幻影が真正なる事實に取て代るは群衆が多數なるを要しない。數名の個人が共に集まると群衆を成し、縦令彼等が學識高き人士であつても、彼等は其の専門以外の事に關しては凡て群衆の特質を持ち、彼等が個々人として所有せる觀察の能力及び批判的精神は直ちに消え失せる。發明の才ある心理學者ダヴェー氏は此點に於て極めて奇異なる實例を與へて居る。是は此頃心理學年報に引用されたるものにして茲に引用の價値がある。

ダヴェー氏は有名なる觀察者の集會を催して其の面前で降靈術の現象、靈魂の顯現及び石盤書き等の實驗を演じた。其中には最も有名なる英國の科學者ウオーレス氏も居た。實驗の際は列席者をして實驗用の物品を驗査せしめ、其の望みに従つて封印を爲さしめなどした。次でダ氏は是等知名の觀察者から此の觀察したる現象は唯超自然的手段に依てのみ得らるゝとを承認したる報告書を得たる上にて、實は此等は皆極めて單簡なる手品の結果であるを告白した。此の記事の著者曰くダヴェー氏の實驗に就て最も驚くべきとは手品其ものゝ奇なるにあらずして、之に慣れざる實見者等が手品に關して作製したる報告書の極端なる弱點である。果して此の如くであれば多數の實驗者と雖ども全く誤謬なる事を眞實として詳細なる報告を爲すときは明かである。併し其の結果は彼等の報告を正確なりとすれば、彼等の記述する現象は手品に依て説明し難いのである。ダヴェー氏の工夫した方法は極めて單簡なるもので人をして其の大膽なるに驚かしむるものであるが、彼は群衆の心意を支配し群衆をして

實際見ないものを見たと思せしむる力を有して居たと。吾人は茲に於ても催眠術者が被施術者に對して有する力を見るのである。加之此力が知識卓越し豫め疑念を起す様に仕向けられたる人々の心意の上にも働くものなるを見る時は、普通一般の群衆を欺くとの容易なるは之を諒解するに難くないのである。

此類の實例は數へあぐれば幾らもある。余輩が今此書を書き居る間にも、各新聞紙は二人の少女がセーヌ河に陥つて溺死した記事を滿載して居る。此の二人の少女は六人の證人に依て何の誰たるかは疑ふべくもないと確められ、凡ての證言が全く一致したので、檢察官も其間何等疑を挾むべき餘地なしとし死亡證明書をさへ起草せしめた、然るに葬儀執行の間際に至て偶然の機會で死んだと思はれた少女が生きて居ると、加之溺死した少女とは似ても似つかないと言ふとを發見した。此例も先きに引例した場合と同じく幻想錯覺に囚はれた最初の證人の證言が他の證人を動かすに充分であつたのである。

之と同じき各場合に於ては暗示の出發點となるは何時でも或る個人が多少漠

然たる追憶に依て心中に思ひ浮べたる幻想錯覺にして、此の幻想錯覺の證言の結果として傳染が起るのである。若し最初の觀察者が極めて感受性に富めるものであれば、彼が識認したりと信ずる死骸が縱令實際に似たる點なしとしても、或る特殊の點例令ば創痕又は服裝の或點に若しや其人にあらぬかとの考を起させるものがあればそれで充分である。斯うして起つた考が一種の結晶の中核となり理解力を侵し批判力を麻痺せしめる。事既に茲に及べば觀察者の眼に映ずるものは最早其物の實相にあらずして心中に思ひ浮べられた假相に過ぎない。次に擧ぐる例は既に古い例で、此頃又新聞に傳へられて居るのであるが生みの母親が其子の死骸を誤認するなどのあるのは此の爲めである。此例に於ても余が上に説きたる二種の暗示を認むるゝが出来る。

死兒は他の一兒童に依て識認せられたが其の識認が誤まり居たる爲め種々の無根の臆説を生ずるに至つたのである。

之に就て異常なる一事が持上つた。一人の學童が死骸を認めた翌日、一婦人

が「あゝ之は吾が兒である」と叫んだ。

彼女は死骸に近く連れて行かれた。衣服を調べ、額の創痕迄見て叫んだ「確かにそうです、去る七月行衛不明となつた私の兒です、此兒は私の手から盗み去られて殺害されたのです」と。

此女はフル街の御用聞にてシャヴァンドレーと言ふ者であつた。其夫の兄弟も召喚されて訊問されたが是こそ幼いフリリペールですと答へた。同じ街に住んで居た五六人の人々もラ、ヴィレットにて発見されたる兒童をフリリペール、シャヴァンドレーであると認めた。其中には此の兒童の學校の先生もありて少年の佩用したメタルを證據として當人であることを述べた。

併し隣人も學校の先生も夫の兄弟も生みの母も皆誤つて居た。夫から六週間経つて此の死兒の身許が分つた。此の兒童はボルドーの者で同地で殺害され或る運搬會社の手で巴里に運搬されたのであつた（一八九五年四月二十一日レクレール所載）。

茲に注意すべは此等の鑑定が最も屢々婦人小兒に依て行はれたことである。

換言すれば最も印象を受け易い人々に依て行はれたことである。同時に是は法廷に於ける婦人や小兒の證言の何の價値なきを示すものである。殊に小兒の證言は決して懇請すべきものでない。役人等は小兒は虚言を吐かないと言ふとを口癖に言つて居るが、若し彼等にして少しく心理學の素養があつたら反對に小兒は必ず虚言を吐くものであると知るであらう。彼等の虚言の無邪氣なるは疑なきも虚言は矢張虚言である。告訴された人の運命を決するには小兒の證言に依るよりは、屢々行はれた如く、寧ろ一個の貨幣を投げて決した方が遙かに安全である。

今群衆の觀察力に立ち歸て論ずれば、吾人の結論は「群衆の集會的觀察は最も誤謬多くして往々にして或る一個人が傳染に依て其の同輩に暗示したる迷想に過ぎざるとあり」と言ふのである。多數の事實に依て見るに皆群衆の證言の全く信ず可らざるを教へて居る。今より二十五年以前セダンの戰に於て有名なる

騎兵攻撃に参加したるものは幾千を以て數ふる程であるが、其の日撃者の證言彼此矛盾して其の何人が指揮者たりしかは今以て決定し難いのである。英國のウールスリー將軍は其の近著に於てウォーターローの戰の最も重要な事件に關し重大なる事實の誤認が今日迄も傳はり來れるとを論證して居る——而かも此の事實は數百人の證人の證明した所である。

此の如き事實は群衆の證言の價値なきを示すものである。論理學の論説は事實の正確を證する最も有力なる證據として多數の證人の一致を擧ぐるも、吾人が群衆心理學に就て知る所を以てすれば、此點に關する論理學の所説は之を書き改めなければならぬ。最も多くの疑を存する事件は最も多數の實見者による事件である。或る事實が幾千人の實見者に依て同時に承認されたりと言ふは、原則として眞正の事實と、承認されたる其の事實の記録との間に大なる相違ありと言ふとである。

是に由て之を觀れば歴史の著書は純然たる想像の産物と見做なければならぬ

歴史の著書と言ふは、觀察を誤れる事實の記録に、反省の結果たる説明を加へたるものである。歴史を書くは全く時間の空費である。若し過去の時代が其の文學的美術的及び紀念的の述作を吾人に傳へなかつたならば、吾人は過去に關しては絶對的に何事も知らなかつたであらう。吾人は人類の歴史に於て重要な役目を演じたる偉人例令ばヘルキュールス、佛陀、マホメット等の如き人物の生涯に關し、片言雙語でも其の眞實を傳ふるものを有するか、恐く何人も之を有するものはなからう。加之事實に於ては彼等の實傳は吾等に餘り重要でない。吾人と關係する所は是等の偉人が世上に流布せる傳説中に如何に表現せるかにあり。群衆の心を動かすものは決して實在の英雄にあらずして傳説の英雄である。

不幸にして傳説は——縱令明確に書籍に記録されたるものにも——決して萬世不易のものでない。群衆の想像は時日經過の結果として絶えず之を變形し改造す。民族的原因の影響を及ぼす際は殊にそうである。舊約聖書の殺伐なるエホバの神と、聖徒テレースの愛の神との間には雲泥の差異があり、支那に尊崇

されたる佛陀は、印度に畏敬されたる佛陀とは何等共通の特性を持つて居ない。又英雄の傳説が群衆の想像に依て變改せらるゝは必しも數百年の経過を必要としない。傳説の變更は往々にして數年内に起るとがある。吾人は現代に於て史上最も偉大なる英雄の一人に關する傳説が、五十年足らぬ内に數度變更したのを見た。ブルボン家の治下に於てはナポレオンは一種の詩歌的寛裕仁慈なる博愛家で、詩人は稱して卑しき者の友にして永遠に賤が伏屋に記憶さるべき人となしたが、其後三十年にして此の同じ英雄は血に渴せる壓制者と非難され、權勢を篡奪し自由を破却し單に自己の野心を満足せしめん爲め、三百萬の人命を斷つに至つた惡徒であると排斥された。然るに現在に於て吾人は此の傳説が新たなる變化を爲して居るのを實見して居る、若し傳説が此の如く、幾多の歲月を経ると共に變遷窮まりなく、矛盾せる記録が相對立して傳はらば、後世の學者は英雄其者の實在を疑ふと尙ほ今日の學者が佛陀の實在を疑ふ如きに至り、之を以て太陽神話に過ぎずと爲し、又はヘルキュールの傳説を引延ばした

るものと思ふに至るであらう。併し彼等は此の曖昧不確實なる事に對しても尙ほ自ら慰むる所があるであらう、蓋し彼等は今日の吾々よりも群衆の特質心理に就ては知る所深く、一體歴史と言ふのは神話以外に何等過去の記憶を保持するとの出来ないものであるとを了知するからである。

第三節 群衆の感情の誇張及び眞率

群衆の表示する感情は善でも惡でも單簡と誇張との二重の特性を有する。他の多くの場合に於けると同じく此點に於ても群衆中の個人は原始時代の人類に似て居る。彼は細密なる相異の點を認むるとが出来ない、只事物を全體として見て中間に來る諸形相には盲目である。如何なる感情でも一度表示せらるゝや暗示と傳染との過程に依て、急速に廣く傳達し一般に承認せらるゝを目的として益々其の勢力を増加さるゝものであるが、群衆の感情の誇張は此の事實に依て愈其度を高むるものである。

群衆の感情が單簡にして誇張なる結果群衆には疑念又は不確實と言ふものがない。婦人の如く直ちに極端に走る。疑念一度起れば直ちに的確なる證據ある事實と見做す。孤立せる個人の場合に於ては嫌厭とか非難とか言ふ感情は萌しても決して勢力を得るものでないが之が、群衆の中に没入せる個人の場合になると直ちに激烈なる憎惡の念となるのである。

群衆殊に異質の群衆に在りては責任の觀念全く缺如せる故其の感情も亦激烈となる。群衆の數が増せば増す程責任を免がるゝこと益確實となり、多人數集合の爲め顯著なる一時的勢力を得たりとの考を起さしむるので、孤立せる個人にありては不可能なる感情行爲も群衆にありては可能となる。群衆の中にありては愚者も、無知者も、嫉妬深き者も、自己が微力無能であると言ふ考を脱して、其の代りに犂猛にして一時的ではあるが絶大なる勢力を得たりと言ふ考を有するに至る。

不幸にして群衆が誇張に走る此の傾向は屢惡き感情に伴ふて現はる此等の感

情は原始的人類の本能の遺傳的遺物にして、孤立して責任を重ざる個人は懲罰を恐怖するが爲めに餘儀なく之を矯正せんとするものであるが、群衆には此事なき爲め忽ちにして最惡の極端に陥るのである。

併し群衆は之を導くに熟練なる方法を以てすれば、義勇奉公以て高尚なる道徳を實踐窮行せしむること能はざる譯ではない。却て單獨なる個人よりも能く是等の美質を發揮することが出来る。此點に就ては群衆の道徳を研究する際更に論ずる積りである。

群衆は其の感情誇張に陥り易き爲め唯極端なる感情に依てのみ動かさるゝものである。群衆を動かさんとする演説家は無暗に激烈なる言辭を使用せねばならぬ。誇張し斷言し反覆し、而して決して道理に訴へて事物を立證する如きことをせざるは、公會に於ける演説者の熟知せる論議方法である。

加之群衆は其の主人公の感情にも同様の誇張を與へる。彼等の外觀の美質道徳は常に誇張して吹聴せねばならぬ。舞臺に於ては群衆は實際生活に於て到底

見ることの出来ない大勇氣、大道德、大美質を劇の主人公より要求するものであると言ふは蓋し至言である。

劇場に於ては演劇を見るに特殊の立場を重要としたるものであるが是は尤ものことである。此の如き立場は疑もなく存在して居るのであるが、其の存在の理由は概ね常識や論理とは何等の關涉がない。群衆の情に訴ふるの術は低級たるに相違なきも之は全く特殊の適應力を要する。劇を讀て其の成功を説明するは往々にして不可能である。劇場の支配人も或る脚本を引受けて上場する際、之が果して成功するや否やは當初確實なる見込の立たないのが原則である。蓋し之に對して的確なる判断を下すには、支配人自身が先づ群衆となり得なければならぬのである。

茲に更に論歩を進めて説明する事を許されれば、吾人は再び人種的考察の絶大なる勢力を示さなければならぬ。一國に於て群衆の大熱心を喚起した演劇が他國に於て何等の成功を見ないか、又は局部的のありふれた成功を見るに過ぎ

ない事がある。是は異りたる公衆に作用すべき勢力を働かしむることが出来ないからである。

群衆に於ける誇張の傾向は單に感情に關して現はるゝもので、知識上の事柄に關して現はるゝのでないことは爰に改めて言ふ迄もない。或る個人が單に群衆の一部を成すとの事實だけで、其の知識の標準が直ちに著しく低下せられることは既に説いた通りである。學識高き官憲タルド氏も亦其の群衆の罪惡研究に於て此の事實を證明して居る。是に由て觀れば群衆が極めて高き標準に上るも、又反對に最下の標準に下るも單に感情に關しての事である。

第四節 群衆の不寛容、獨裁及び保守

群衆は唯單純にして極端なる感情を知つて居るのみで、彼等に暗示された意見や觀念や及び信念は、全體否認するか全體承認し、又は絶對的眞理と見做すか絶對的誤謬と見做すのである。推理より生じたるにあらざして暗示に依て生

せる信念は常に斯うである。宗教的信條に不寛容を伴ふことや、此の信條が人の心意に專制的權力を揮ふ有様は皆人の知て居ることである。

眞偽の如何なるものなるかに就ては疑念を有しながら、自己の團結の勢力に就ては明確なる觀念を有するので、群衆は寛裕の精神を缺くと同時に一時の感情に鼓舞せられて行動する傾向がある。個人は能く反對説を容れ討論に耳を傾くも群衆には決して此事がない。公會に於ては辯士が僅に反對説を唱へると忽ちに喧囂なる罵詈を以て迎えられ、若し辯士が其の論旨を固執して動かざることあれば鐵拳、場外放逐は直ちに之に次ぐのである。若し官憲臨場して制止するにあらざれば反對説の辯士は往々にして死に致さるゝのであらう。

獨裁不寛容は孰れの群衆にも付き物であるが、群衆の種類に異なるに従て其の強さの度には差違がある。人々の凡ての思想感情を支配する人種の根本的觀念は茲にも現はれて居る。羅典民族の群衆には殊に專横不寛容の精神が最も發達して居る。實際羅典民族系の群衆にありては此の性質が非常に發達シアングロ、

サクソン人種に於て最も有力なる個人獨立の感情は全く破壊されて居る。羅典民族の群衆は自己の附屬せる黨派全體の集合的獨立に關心するのみである。羅典民族の獨立の觀念の特色は彼等と意見を異にする人々を即座に且つ壓制的に自分等の信仰に服従せしむる必要にあるのである。羅典民族間にありては宗教裁判所時代の群衆以來、各時代の極端派の人々も未だ曾て是れ以外の自由の觀念に到達したことがない。

專横と不寛容は群衆が極めて明瞭なる觀念を有し、容易に之を懷抱し、若し一度他より之を以て臨まるゝ時は、自ら之を實行する如く直ちに之を受け容るゝ感情である。群衆は強力に對しては温順なる敬意を示すも親切に依ては殆ど動かさるゝ所がない。蓋し群衆は親切を以て微力の別名に外ならずとするのである。群衆は平穩なる主君に決して同情を寄せず、却て自己に強烈なる壓制を加ふる暴君に同情を傾ける。群衆が最高の記念像を建つるは何時でも是等暴君の爲めである。群衆は自分等が其の權力を剝奪したる暴君を好で蹂躪することある

は眞であるが、是は其の暴君が權力を失ひたる後、人民を恐怖するに足らざる故に輕蔑すべしと爲し再び人民に君臨したるが爲めである。群衆の氣に入りの英雄の典型は何時でもシーザーの面影を有するもので、其の威望は彼等の心を引き付け其の權勢は彼等を威壓し其劍は彼等を畏怖せしむるものである。

群衆は何時でも微弱なる權力に反抗し、強力なる權勢に屈服せんとするものである。若し彼等を支配する權勢が強弱の中間に位するものなれば、群衆は何時でも極端なる感情のまにまに行動し、交互に無政府より屈從に、屈從より政無府にと移り行くのである。

併し群衆の感情の中にありて最も強盛なるは革命的本能なりと信ずるは全く群衆心理の誤解である。吾人が斯く誤解するは單に群衆が動もすれば暴力に訴へる傾向がある爲めである。群衆の反抗的破壊的暴動は常に極めて一時的である。群衆は無意識的考慮に支配され其の結果餘りに世俗的遺傳的勢力に服従するものである故に保守的となるものである。彼等の爲すが儘に放任して置けば

彼等は直ちに混亂不秩序に倦み、本能的に自ら屈從の状態に歸るのである。ナポレオンが絶大の精力を發揮して自由を悉く壓迫し、暴虐の鐵腕を國民に加へた時、彼を驩呼して迎えたのは、最も傲慢頑強であつた所のジャコビン黨であつたのである。

群衆の保守的本能は其根極めて深きものたるを充分に知悉してないと、歴史殊に民衆的革命の眞義を了解することは困難である。成程群衆は彼等の制度の名目を變更し、時としては暴力を以て其の目的を達せんと希望するであらう、併し是等諸制度の心髓は民族の遺傳的必要の表現であつて、群衆は此の制度を保持せざらんと欲するも能はざるものである。群衆の不斷の云爲行動は全く皮相の事柄に其の勢力を及ぼすのみであつて、實は群衆は諸原始的人類と同じく牢として抜く可らざる保守的本能を有して居る、彼等が諸傳説に對する狂熱的尊敬は絶對的で、彼等は生存の根本的條件を變更し得べき新奇の事柄に關しては無意識に深甚なる恐怖心を懷抱して居るのである。若し民衆が彼等が今日

に於て行使する如き權力を織物機械の發明、蒸汽力又は鐵道の始めて使用せられたる當時に於て有して居つたら、是等の發明は或は實現されず、縱令實現されても革命虐殺の犠牲が幾度か供せられたる後の事であつたらう。科學工業の大發明が既に効果せられたる後に至て始めて群衆の勢力が現はれて來たのは文明進歩の爲めには極めて幸運の事である。

第五節 群衆の道德

若し道德なる文字を以て或る社會的傳習に對する不斷の尊敬、利己的衝動の永久的抑制の意味であるとすれば、群衆は道義的なるには餘りに衝動的にして餘りに可動性に富て居るは明かなことである。併し若し此の道義と云ふ語義の中に歿我、献身、清廉、信心、公正の如き諸美質の一時的發現をも含むものとするれば群衆は往々にして頗る高尚なる道義を示すものであると言ふことが出来る。

(54)

是迄群衆を研究した若干の心理學者は犯罪行爲の觀察點からばかり考察し此の犯罪行爲の極めて多し事を見て群衆の道義的標準は極めて低いものであると云ふ結論に達した。

是は疑もなく其通りであるが其の原因は何であるか。吾々が原始的時代より遺傳し來りたる野蠻破壞的本能が吾々の心の中に潜在して残つて居るからである。單獨なる個人の生涯に於ては是等の本能を満足させると禍其身に及ぶの危険があるが、無責任なる群衆の中に没入すると各個人は責任がないから自由に群衆に隨て行動するのである。併し普通の場合にありては吾人は同胞人類に破壞的本能を行使することが出来ないから専ら動物に對して之を行ふ。現今盛に流行して居る狩獵に對する熱情と、猛烈なる群衆の行爲とは同一原因から出て居る。防禦の手段を有せざる犠牲を徐々に弔殺にする群衆は、極めて卑劣なる兇惡性を現はすものであるが、哲學者に取ては此の兇惡性は多人數集合し獵犬を使用し、不幸なる麋鹿を追究殺戮して快しとする獵夫の兇惡性と密接の關係

(55)

があるのである。

群衆は殺人放火等凡ての罪惡を犯すことがあるが、又忠勤献身公正等單獨なる個人よりも遙かに高尚な行爲を爲すことも出来る。光榮名譽愛國心等の感情に訴ふる時は殊に群衆を組成せる個人に感動を與へ、彼をして其の生命を犠牲にするも尙ほ顧みざるに至らしめる。歴史を緜けば十字軍の如き一七九三年の義勇兵の如き類例は幾らもある。一大公正一大忠勤は唯多人數の集合に依てのみ出来る。昔から信條思想及び自分の殆ど了解せざる名義の爲めに從容死に就いた群衆は數限りもない、同盟罷工する群衆は一時を瀾縫する些細なる貨銀の増加を得んが爲めに罷工すと言ふよりは、寧ろ同盟罷工の命令に服従せんが爲めに罷工するのである。一身上の利害問題は單獨なる個人の行爲にありては殆ど唯一の動機なるも、群衆に在りて一身上の利害が有力なる動機となるは希有のことである。群衆が自己の知識にては諒解すること能はざる幾多の戰爭に出で、獵夫の銃にて催眠術を施されたる雲雀の如く一身を犠牲に供して顧みなかつたのは決して決して利己心の指導に従つたものと言ふことは出来ない。

純然たる惡漢の場合に於ても單に彼等が群衆の中にあるとの事實が一時彼等に嚴正なる道德主義を遵奉せしむることあるは屢見る所である。テレーヌが注意を喚超して居る事實に據れば、一七九二年九月虐殺の行はれたる際、暴徒等は被害者の身體より發見したる手帖や寶石を幹部委員の卓上に積み上げた。是等は彼等が持ち逃げしようと思へば持ち逃げすることの出来たものである。又一八四八年の革命の時チュイレーリ宮に侵入して咆哮跳梁怒號を逞ふした群衆は、彼等の驚異を惹起した物には一切手を觸れなかつたが其の一つでも彼等の幾日の食を支えることが出来たのである。

此の如く個人が群衆に依て徳化せらるゝは決して恒久の原則ではないが併し屢目撃せらるゝ所である。前述の事例よりもつまらぬ事例に於ても見られる。既に説きたる如く劇場に於ては群衆は劇の主人公より誇張したる道德を要求する、又集會の席上に於ては其の會衆が劣等なる人物であつても一般に極めて慎

深き風を装ふは普通のものである。放蕩者、誇言者、亂暴者も少しにても如何はしき光景又は言語を見聞すれば往々不平の聲を洩すも、實は彼等は平生にありてはそれよりも甚しき言語を用ひて居るのである。

果して然らば群衆は低級の本能に身を委ねるとあるも、亦時々高尚なる道德の標準を示すとがあるのである。若し公正、辭讓及び實際的若くは空想的理想に對する絶對的歸依が道德的美質であるならば、群衆は最も賢明なる哲學者も殆ど到達し得ない高尚なる道德を有する。群衆が是等の道德を實行するは無意識に行ふに相違なきもそれは吾人の問題とする所でない。群衆が殊に無意識的考慮の指導を受け道理に従はぬと言ふとに對して吾人は餘りに慨嘆するの要はない。若し群衆が或る場合に道理を推し直接の利害を打算して後に行動したら、文明は地球上に起らず人類は何等の歴史をも有せざりしとであらう。

第三章 群衆の思想、推理力及び想像力

第一節 群衆の思想

余は以前一著書に於て思想が國民の進化に及ぼす作用を研究するに際し各文明は、殆ど更新せらるゝとなき小數の根本思想の結果なることを示し、是等の思想は如何にして群衆の心意に植ゑ付けられたか、植ゑ付けられる迄如何なる困難を経過せねばならなかつたか、一旦群衆の心意に植ゑ付けられたらば如何なる權力を有するに至るかを示し、最後に歴史上の大紛擾は原則として是等根本思想の變化の結果であることを示した。

此の問題は曩に既に詳論したるを以て今は爰に再論するを避け専ら群衆の諒解し得べき思想、群衆が之を懷抱する形式の問題に於て一言しようと思ふ。

此の如き思想は二部門に分類するとか出来る。第一は一時の勢力に依て創造せらるゝ偶然的・一時的的思想であつて、例令ば一個人又は一個の主義に對する心酔の如き是れである。第二は環境、遺傳の法則、及び輿論に依りて非常に鞏固

となれる根本思想で例令ば昔時の宗教上の信條や今日の社會的民主的思想の如きは是れである。

譬へて言へば是等の根本思想は緩々洋々として進路を追ひ行く河流の如く、一時的思想は變化極まりなく、絶えず水面を振搖する小波瀾の如く、實際に於ては左して重要なものにあらざるも、本流よりも却て人の目に着き易きものである。

現代に於ては吾人祖先の支柱たりし大根本思想は益動搖し來り、悉く堅實性を失ひ、同時に此上に立ちたる諸制度は激しき震撼を感じるに至つた。上記の一時的思想に至ては日々多く形成せられつゝあり、其の外觀は如何にも立派なるも、生氣を有し偉大なる勢力を占むるに至るべき運命を有するものは、絶無僅有の有様である。

群衆には如何なる思想が暗示されても、其の思想が絶對的非讓歩的にして單簡明白なる形式でないとは有効なる勢力を持たない。斯かる思想は假相を籍りて

現はれ此の形式に於てのみ群衆に諒解せらるゝものである。此の假相の下に現出する思想は類同又は連絡と言ふ論理的紐帶に依て連結せらるゝものでなく、丁度幻燈の映畫が差し替へらるゝ様に交互に代り合て發顯するのである。群衆の間に矛盾極まる思想が同時に流布せるを見るは之が爲めである。偶發の機會に従て群衆は豫て其の理解の内に蓄へたる諸思想の一の感化を受け、其の結果似ても似つかぬ行爲を爲すに至る。而して群衆は批判的精神を全然缺如せる爲め是等の矛盾を察するとが出来ないのである。

此の現象は群衆に特有なるものでない。多くの單獨の個人の場合にもある。個人でも原始的人類に限らず、例令ば熱心なる宗教信者の如く其の知識の一面が原始人類に似て居る凡ての人の場合にあるとである。歐洲諸大學に於て養成され學位をも取りたる教育ある印度人によく其の實例を見るとがある。彼等に在りては多數の歐洲思想が、彼等の不變なる根本的遺傳的又は社會的思想の上に附け加へられて居る。而して時々の模様依て表面の歐洲思想、又は根底

の遺傳的思想が様々の特別なる行爲言動を伴つて發現するので、同一の個人が之が爲め非常に矛盾せる行動に出づるところがあるのである。併し單獨なる個人が行爲の動機となる程勢力ある思想は、唯一の遺傳的思想あるのみなれば、是等の矛盾は眞實の矛盾と謂ふよりも寧ろ外觀的皮相の矛盾である。個人の行爲が今の瞬間と其の次の瞬間と刻々眞に全く矛盾するは、異人種雜居の結果、個人が異りたる遺傳的傾向の間に置かるゝ時に限る。此等の現象は心理學上極めて重要なものなるも爰に之を詳論するの必要はない。余の考では其等の現象を充分諒解するには少くも十年の旅行と觀察が必要である。

思想が群衆に諒解せらるゝは極めて單簡なる形式を取りたる後に限るから其の思想が一般民衆に流布する迄には徹底的變形を經ねばならぬ。殊に稍高尚なる哲學的科學的思想を取扱ふに際し是等の思想を群衆の知識の水平に引下ぐるには一大變更を加ふるの必要がある。此の變更の程度如何は群衆の性質若くは群衆の屬する人種に依るも其の傾向は必ず原思想を更に縮少し單簡にするものである。

である。社會的立脚地より見れば、實際に於ては思想の體系換言すれば思想の高下と言ふ如きものは存在しないと言ふのは此の理由に依るのである。當初に於て或る思想は如何に偉大なる思想でも、又眞正なる思想でも、群衆の知識の標準に引下げられ、群衆に感化を及ぼすに至ると云ふ單純なる事實に依て、其の崇高偉大を成せる要素は殆ど凡て奪ひ去らるゝのである。

加之社會的立場より見る時は思想の體系的價值、其の内的眞正の價值を言ふは別段重要な事でない。吾人の考察する必要があるは其の思想の生ずる効果である。中世紀の基督教思想、前世紀の民主思想。又は今日の社會思想は決して甚だ高尚なるものでない。哲學的に考察すれば是等は皆幾分悲むべき誤謬と見做し得べきものなるも、過去に於ける其の權力は實に偉大なるものであつた、今後亦其の權力を持続するであらう。而して將來尙ほ永く國家の行爲を決定する最も重要な要素の中に地位を占むることであらう。

思想は變形して群衆に諒解せらるゝに至りたる時と雖ども直ちに其の感化を

及ぼすものでない、後に論ずる様に無意識の境界に入りたる時、即ち一個の感情となりたる時に至て始めて及ぼすものである、之には幾多の時日を要するのである。

一個の思想は其の正しきことが證明されたからと言ふて直ぐに影響を及ぼし有効なる行爲を生ぜしむるものと思ふてはならぬ。こんなことは教養ある人の上にもでもないものであるから勿論群衆にはないことである。最も明白なる論證でも大多數の人には殆ど何等の影響を及ぼさざることを見ても、此の事實は直ちに諒解することが出来よう。證據が極めて明晰であれば教育ある人士は一且其説を認容することあるも、其の變説も無意識の自我に依て直ちに舊の考に復歸され、數日を経て彼を見れば全然同一の言辭にて新たに古き議論を持ち出すが常である。彼等は新説を容れたる如く思はるゝも、實は既に感情に化成したる思想の感化を受けて居るのである。吾々の行爲言辭の隠れたる動機に感化に及ぼすものは此の如き思想あるばかりである。群衆の場合に於ても亦此の外

に出でないのである。

一個の思想が種々の過程を経て民衆の心意に浸染したる時には、實に不可抗力を有するに至り、幾多の効果は之より簇生し、之に抵抗するは無益の業となる。佛國革命を惹起したる哲學的諸思想が群衆の心意に植ゑ附けらるゝ迄には殆ど一世紀の歳月を費して居る。而して一度民心に根を生ずるや決河の勢何ものも之を抑止するものなきは人の熟知する所である。全國民が一團となつて社會的平等の獲得、抽象的權利及び理想的自由の實現に努力したる爲め、歐洲列強の帝位を震撼し西歐天地の根柢を動亂せしめ、次で二十年の間歐洲諸國民は慘憺たる戦亂の渦中に投じ、歐洲は目のあたり成吉思汗、タメルランをも尙ほ戦慄せしむる様な修羅場を現出したのである。一思想の宣傳より此の如き規模廣大なる結果を生じたのは實に世界未曾有のことである。

思想が群衆の心裡に植ゑ附けらるゝには非常の長年月を要するものなるが、一旦植ゑ附けられた思想を根絶するにも亦之れに劣らざる長年月を要するので

ある。此の道理ある故に思想に關しては群衆は識者哲學者よりも常に數代後るゝのである。凡ての政治家は今日に於ては前記の根本的思想の中に誤謬の混入したるを熟知し居るも、是等の思想は今日尙ほ絶大なる勢力を有して居るので、彼等は餘儀なく今や自ら眞理と信ぜざる政治上の原則に従て政治を施して居るのである。

第二節 群衆の推理力

群衆は推理せず又推理に依て動かされずとは絶對的に言ふことは出来ない。併し群衆の用ゐる議論、群衆に感化を及ぼすに足る議論は、論理上の立場より見る時は極めて低級のものにして、之を推理と稱し得るは單に之に類似の點があるからである。

群衆の低級なる推理も高級なる推理と同じく聯想の基礎に立てるもので、群衆に依て連結せられたる思想の間には、單に皮相的類似又は連續の紐帶がある

ばかりである。群衆の推理法はエスキモー人の推理法に似て居る。エスキモー人は經驗に依て氷が透明體にして口中に於て溶解することを知り、硝子も透明であるから溶解するだらうと結論する。又野蠻人の推理法に似て居る、野蠻人は勇敢なる敵の心臓を喰へば己も勇敢となると想像して居る。又一人の傭主に虐待せられたる爲め、直ちに凡ての傭主が皆使用人を虐待するものと結論する労働者の推理に似て居るのである。

群衆の推理の特色は、單に表面上の相互に關係ある異りたる諸事物を連結して考へ、個々の場合に直ちに概括的論斷を下すのである。群衆を支配することを心得て居る者が群衆に示すのは何時でも此種の議論で、又群衆が動かさるゝのも此種の議論に限るのである。論理的議論の連鎖は群衆には全く不可解である。此點から言へば群衆は推理せずとも、群衆の推理は誤謬なりとも、群衆は推理に依て動かされずとも言ふことが出来る。吾人は往々之を傾聽したる群衆に莫大なる勢力を及ぼしたる演説を讀みて、其の理由の薄弱なるに驚くこと

があるが、實は是等の演説は哲學者に讀ませる爲めでなく、群衆を説服せん爲めのものであつたことを忘れて居るのである。群衆と親しく交通して居る辯士は群衆を誘致すべき假相を喚起することが出来る。之が出来れば彼の目的は既に到達したのである。此際に於ては反省の結果たる數萬言の博辯宏辭も、説服せんとする群衆の頭腦に響く點に於ては、僅か數言の語句にも如かないのである。群衆は推理の力を缺ける故批評的精神を顯はすこと能はず、即ち眞理と誤謬を區別すること能はず、何事に對しても正確なる判断を下すこと能はざるは言ふ迄もないことである。群衆に受け容れられる判断は彼等に強制的に押し付けられた判断であつて、決して是非を討論した後に採用したものではない、此點に關しては個人で群衆の水平線以上に出でないものが極めて多い、或る意見が容易に一般に流布するのは、殊に大多數の人々が自己に特有なる意見自己の推理を基礎としたる意見を構成することの出来ないより來るのである。

第三節 群衆の想像力

推理力を缺如せる人々の場合に見る如く、群衆の假形に基づく想像力は極めて有力活潑にして亦極めて印象を受け易い。人物なり事件なり又は偶發の出來事の爲め、群衆の心に喚び起されたる假相は、殆ど實形實相と異なる所のない生き々としたものである。群衆は或る程度迄は睡眠者の地位に居る如きものである。眠むれる人の理性は暫く休止せるを以て、心裡に極端なる假相を現出するも、此の假相は少しく反省を加ふれば忽ちに雲散霧消して姿を消すのである。群衆には反省の力も推理力もないから、斯かる事はありそうにもないとの考を起すことがない、然るに通例は最も顯著なる事實は最もありそうにもない事なるは注意すべきことである。

殊に群衆を動かすは事件の奇異なる傳說的方面にあるは之が爲めである。文明を解剖して見ると、實は文明を支持するものは異常なる傳說的物事に外なら

ざるを見るのである。歴史を見ると外面に現はれた皮相が、内面に潜んだ實質よりも常に重要な働を爲して居る。歴史に於ては虚偽は何時でも眞實より大なる力を示して居る。

群衆は假相を思考し得るのみなるが故に、又假相に依てのみ印象を受くるのである。群衆を恐怖せしむるも、群衆の心を懐柔し其の行爲の動機となるも皆假相のみである。

假相に最も明白なる形式を與へて示す演劇が、常に群衆に對し最も大なる勢力を有するは之が爲めである。麵麩と觀劇は古代羅馬市民の理想としたる所で、彼等は之れ以外何等求むる所がなかつた。爾來幾世代を経るも此の理想は殆ど何等の變化を受けず、各種の群衆の想像に演劇よりも偉大なる影響を及ぼしたものは曾てない。演劇では全體の觀衆が同時に同様の感情を経験する、只是等の感情が直ちに行爲に變じないのは、最も無意識の觀者でも彼が幻想の犠牲となり、想像的冒險事を見て泣いたり笑つたりして居ると言ふ事を無視すること

能はざる爲めである。併し時としては習慣的暗示の如く、假相に依つて暗示せられたる感情が、極めて強烈にして行爲に變更することもある。次の話はよく聞く所である、或る人氣を博したる劇場の管理者が何時でも眞面目なる劇ばかり上場し居りたる結果、反逆者の役者が家路に就くに當り之に保護者を附けて觀衆の暴行を防がねばならぬこととなつた。是れ觀衆が縱令架空の事ではあるが、反逆者に依て行はれたる罪惡を憤ふる餘り之に扮したる俳優に暴行を加ふるを恐れたからである。余思ふに是は群衆の心的狀態殊に群衆が暗示を受け易いことを示す最も好い適例である。群衆に對しては假構も實在も殆ど同様の勢力を有し、群衆は兩者の間に何等の區別を置かない明かな傾向を示して居る。

征服者の權力も國家の力も民衆の想像を基礎として立て居るものである。群衆を指導するには殊に其の想像を動かすのが第一の秘訣である。凡ての歴史上の大事實も、佛教基督教回々教の興隆も、宗教改革も、佛國革命も、今日に於て將に侵入し來らんとする氣勢ある社會主義も皆群衆の想像の上に惹起された

る強き印象の直接又は間接の結果である。

加之各時代各國の大政治家は專制極まる暴君に至る迄、皆此の民衆の想像力を彼等の權勢の基礎と見做し、之に反抗して政治を施さんとは夢にも思はなかつた。ナポレオンは國事參議院に告げて曰く余がヴァンデアの戰を終結したるは舊教徒となりたるが爲め、埃及に根據を得たるは回々教徒となりたるが爲め、伊太利の僧徒を藥籠中のものと爲したるは羅馬法皇黨と爲りたるが爲めなり、余にして猶太國民を統治せざる可らずとせば余はソロモンの宮殿を再建すべしと。恐くアレキサンダー大王及びシーザー以來、群衆の想像力に印衆を與ふるの術を解したることナポレオン以上の偉人はなかつたらう。彼は絶えず之に感動を與ふることを心掛けて居たものである。戰勝にも之を思ひ、放談の時にも之を思ひ、演説の時にも之を思ひ、一切の行動に際して之を思はざることなく、實に臨終の床に於ても尙ほ之を思ふて居たのである。

然らば如何にして群衆の想像に印象を與ふべきか。間もなく此事を論じよう

と思ふが、今は暫く一言を述ぶるに止めようと思ふ。曰く、群衆の想像力を動かさんとする事業は、智慧即ち推理力換言すれば論證に依て遂行せらるべきものでない。アントニーがシーザーを暗殺したる者に對して民衆の反抗を起さしめたるは、決して巧みなる修辭法を用ゐて成功したのではない只民衆に對してシーザーの遺書を讀み上げ其遺骸を指示したるが爲めである。

何事にもあれ群衆の想像を動かすものは、異常にして極めて鮮明なる假相の下に現はるゝもので、此の假相は全く附帶的説明を脱離せるか、又は單に若干の奇異なる或は神秘的事實を作ふものである。一例を擧ぐれば大勝利、大奇蹟、大犯罪、大希望などは之である。群衆の想像を動かすには事物を全體其儘に群衆の面前にさらけ出して示し、其の起源は決して示してはならない。幾百の小犯罪小事件を示しても、群衆は決して其の想像を刺戟するものでないが、一個の大犯罪一個の大事件は、縱令其の災害が幾百の小事件に比しては比べ物にならない程小であつても、群衆に深甚なる印象を與へるのである。數年前に巴里に於て流行

性感胃流行、し之が爲めに斃れたもの五千を算したことがあつたが、民衆の想像に殆ど印象を與へなかつた。其の理由は此の人命の大犠牲が鮮明なる假相となつて衆目に映じたるにあらずして、只每週供給された統計の報告に依て知られたからである。若し此の死人が五千人でなく只の五百人であつても、例令ばエフエル塔の崩壊と言ふ如き同日に衆人の耳目を聳動する様な事件が原因で起つたら、群衆の想像力に訴ふること蓋し非常に大なることであつたらう。太西洋通の某汽船が何等の報告なかりし爲め、多分洋中に於て沈没したらうと想定された時は、全週間を通じて群衆の想像に深甚なる印象を與へた。然るに官憲の統計に據れば一八九四年の一ヶ年で帆船八百五十隻汽船二百三隻を失つて居る。生命財産に損害を及ぼした點に於ては太西洋通の一定期汽船を失つた比にあらぬも、群衆は時を追つて連續的に發生した損害に就ては毫も懸念する所がない。是に由て之を觀れば民衆の想像力を動かすものは事實其ものでなく、其の事件が現出して衆人の眼に觸るゝ法式にあるのである。言はゞ其の事件が結晶凝

縮して人心に深き印象を與ふべき異常なる假相を生ずることが必要である。群衆の想像力を動かす術を知るは聽て同時に群衆を御するの術を暗るのである。

第四章 群衆の確信に現はれたる宗教的形式

吾人は既に群衆は推理せざること、思想を全體として認容し又は排斥すること、討論や反對説を容るゝ雅量なきこと、彼等に與へられたる暗示は彼等の悟性の全分野に侵入して直ちに行爲となつて現はるゝ傾向あることを示した。又群衆は適宜なる感化影響を與へらるゝ時は彼等を鼓舞した理想の爲めに一身を犠牲にするの覺悟あるものなることを示した。又群衆は猛烈にして極端なる感情のみを懷抱すること、群衆にありては同情は直ちに崇拜となり、反感は起ると同時に化して憎惡となることを認めた。是等の一般的表徴は吾人に群衆の確信の如何なるものであるかを窺知せしむるのである。

是等の確信を精密に調べて見ると、熱狂的な宗教上の信仰の旺盛なりし時

代でも、又前世紀の如き政治的大動亂の時代でも、常に一種特有の形式を取て現はれて居る様に見える。余は之に宗教的情操と言ふ名目を與へたい。

此の情操は極めて單純なる特質を有するもので、例令ば假定的至上者の崇拜、此の至上者が有する權力に對する畏怖心、其の命令に對する盲從、其の獨斷説を批評する能力の缺乏、其の獨斷説を傳播せんとの欲求、及び獨斷説を認容せざるものを悉く敵と見做す傾向杯之である。此の如き情操は眼に見えざる神に對する時でも、木像石佛の偶像に對する時でも、一個の英雄に對する時でも、又は政治上の觀念に對する時でも苟くも上記の諸特質を具備すれば其の心髓は依然として常に宗教的である。超自然的分子も奇蹟的分子も同程度に其中に含まれて居る。群衆は一時彼等の熱心を挑發するのは政治上の法式でも、將た又戰勝の勇士でも無意識的に之に神秘的の力を賦與する。

人は或る神を崇拜する時のみに限りて宗教的と言ふものでない、自己の思想及び行爲の目標となり、嚮導となる主義、又は個人の爲めに心力を傾け意思を竭

し、全靈を捧げて奉事する時も亦宗教的である。

不寛容と狂熱とは宗教的情操に必然の附隨物で、現世及び未來の幸福の秘訣を握れりと自信せる人々に必ず現はるゝ傾向である。此等二個の特質は人々が集合して或種の確信に依て鼓舞せらるゝ時凡ての人に現はるゝのである。佛國革命恐怖時代のジャコピン黨も、其の本質に於ては宗教裁判時代の加持力教徒の如く宗教的なりしが、彼等の残忍なる狂熱は同じ源泉より出て居るのである。

群衆の確信は盲從、残忍及び猛烈なる宣傳の必要と言ふ如き特質を有するが、是等は皆宗教的情操に固有のもので、凡て群衆の信仰は宗教的形式を持つと言ひ得るのは之が爲めである。群衆が歡呼して迎えた英雄は、其の群衆に取ては眞實なる神である。ナポレオンは十五個年間此の意味の神であつた。而して如何なる神も彼より多くの崇拜者を有し、彼の如く其の崇拜者を甘じて死地に赴かしめたものはない。基督教の神でも、異教の神でも、其の配下に來り投ぜし者に對し、彼の如く絶對的權力を揮ふたものは決してなかつた。

古來宗教的或は政治的信條を創設した者は、狂熱的情操を以て群衆を鼓舞作興し、彼等をして其の崇拜服従する所に幸福を發見せしめ、其の崇拜する偶像の爲めに生命を犠牲に供せしむることが出来たからである。是は何れの時代でも皆そうであつた。フェステル、ツ、クーランジェが羅馬ゴールに關する其の名著に於て羅馬帝國は決して武力を以て維持せられたるにあらずして、其の鼓吹した宗教的欽仰心に依て維持せられたるものなりと言つてあるのは尤な事である。彼曰く民衆に嫌忌された政體が、五百年間繼續したと言ふ事は世界歴史に於て例のないことであらう：羅馬帝國の三十軍團の兵が一億萬の人民を制御したと言ふことは實に解す可らざる事なりと。其理は羅馬の偉大の權化たる皇帝が全帝國の人民より同心一致、神として崇拜せられたに外ならぬ。皇帝治下の最少なる町も皇帝禮拜の爲めの祭壇を有して居た。彼又曰く當時羅馬帝國の一端より他の一端に至る迄、皇帝を神としたる新宗教の勃興あり、基督紀元前數年に於て六十の都市に依て代表せられたるゴール全體は、共同してリオン町の附

近にオーガスタス皇帝禮拜の爲に一社殿を建設した：聯合したるゴール各都市に依て選舉された祭司は彼等の國內に於ける重なる人物であつた：是れ皆恐怖と屈從より起りたるものと言ひ難い。全國民皆屈從に甘ずるものではない。殊に三百年間はそうである。皇帝を崇拜したものは宮廷の寵臣でなかつた、羅馬であつた、單に羅馬ではなかつた、ゴール、西班牙、希臘、亞細亞であつた。今日人心を支配する偉人の多數は最早祭壇を持たないが其代り彫像がある。崇拜者は皆彼等の肖像を持て居る。欽仰崇拜の目的たるに至ては昔の偉人に與へられたると著しき相違はないのである。歴史哲學を諒解するには、群衆心理學の此の根本の意義を充分に會得するより外に道はない。群衆は何よりも先づ崇拜の對象たる神を求むるものである。

是等の要求は昔時の迷信にして今は理性の爲めに全く驅逐されたりと思ふは誤りである。感情は理性との永遠の戰に於て決して敗北を取つたことがない。群衆は神や宗教の名目に長く奴隸となつたから、最早是等の名目に耳を傾くるも

のがないが、併し群衆は最近百年間に於ける程多數の崇拜物を持つた例がない。古の神々は決して彼等の爲めに是程多くの彫像や祭壇を建て、貫つたことがないのである。近年ブーランジエ主義の名の下に知られたる民衆の運動を研究したるものは、群衆の宗教的本能の如何に復活し易いものであるかを見ることが出来たであらう。當時如何なる田舎の旅籠屋でもブーランジエ將軍の肖像を藏して居ない所はなかつたのである。彼は凡ての不正を矯正し凡ての弊害を除くの権力ありと信じられ、彼の爲めには生命も惜まないと云ふものが幾千を以て數ふる程あつた。若し彼の品性が其の傳説的名聞と相匹敵するものであつたら、歴史上に於ける彼の位地は蓋し偉大なるものであつたらう。

此の如くなれば宗教が群衆の爲めに必要であるなど、言ふは無用なる陳套の言に過ぎない。蓋し凡ての政治的精神的及び社會的信條は、常に群衆が宗教的形式、即ち議論を容るゝの餘地なき宗教的形式を條件として、群衆の心意中に根帯を占むるものである。縦令民衆を誘て無神論を奉ぜしむるとするも其の無神

的信仰も、宗教的感情に特有の不寛容的熱狂を示し、其の外形に於ては直ちに一種の宗教となるのである。小數の人々より成る實理哲學派の進化は此點に於て不思議の例證を示した。深遠なる思想家ドストイェフスキーの語れる虛無黨員の所爲が、直ちに實理哲學派の行ふ所となつたのに過ぎない。彼は一日理性の光に照されて禮拜堂の祭壇を飾れる神や諸聖徒の像を破壊し燭火を吹消し、時を移さずして其の破壊したるものに代ふるに、ピユヒネルやモレシヨットの如き無神哲學者の著書を以てし、其後再び恭しく燭火を點じたと云ふのである。之を以て見れば彼の宗教的信仰の對象は變更したと言ひ得るも、其の宗教的感情が變つたとは言ふことが出来ないのである。

或る歴史上の出來事——極めて重要なる出來事——は群衆の確信が長い間に必ず取る宗教的形式を知らなければ了解が出來ない。或る社會的現象は博物學者の立場よりは、心理學者の觀察點より研究する必要がある。テースの如きは偉大なる歴史家なれども博物學者としてのみ佛國革命を研究して居るから事件の

眞相は其の觀察を逸して居る。事實は完全に研究して居るが、心理學の研究が缺乏して居るから其の原因に溯ることが出来ないで居る。彼は事實の慘憺たる無政府的兇暴的方面のみを見て其の恐しさに戦慄し、大演劇の主人公に於て、其の本能に何等抑制を加へず、放縱無頼に一身を投ぜる癡癩的野蠻人以上のものを認むることが出来なかつた。佛國革命の強暴、其の殺戮、其の宣傳の必要、其の萬物に對する宣戰は、只佛國革命は單に民心に新たなる宗教的信仰を植ゑ附けたのであつたと言ふ事で説明したばかりである。宗教改革、聖バーソロミュー祭の虐殺、佛蘭西の宗教的戰爭、宗教裁判、恐怖時代等は皆同種類の現象である。即ち宗教的感情に依て鼓舞作興されたる群衆の齎した所のものである。此の宗教的感情は之に浸染したるものをして、苟くも新信仰の樹立に反對したる者は何ものでも火と劍を以て容赦なく剿滅せしむるものである。宗教裁判の方法は眞正確乎たる信念を有する人々の取るべき方法である。若し他の手段方法を取る様であつたら、彼等の信念は純正確乎等の形容詞を與ふるに足らぬものである。

上記の如き動亂は之を惹起するもの民衆の心靈たる時に於てのみ出来ることである。最も專制的君主と雖ども之を惹起することは出来ないのである。歴史家がバーソロミュー祭の虐殺を以て君王の所爲なりと言ふは群衆の心理も君王の心理も知らないことを示して居るのである。此類の大事件の出現は群衆の心靈より出つるのみである。最も專制なる君主の絶大なる権力と雖ども、只其の出現の時機の遲速に影響し得る外何事も爲し得ない。聖バーソロミューの虐殺や宗教戦争が君王の所爲ならざるは、恐怖時代がロベスピエールや、ダントンや、サン、ジュスト等の所爲にあらざると同じ事である。斯かる事件の根柢には常に群衆の心靈の作用が潜在し居るが、決して君王の權勢があるのではない。

第二卷 群衆の意見及び信條

第一章 群衆の意見及び信條の遠因

吾人は既に群衆の心的状態を研究し群衆の感情、思惟、准理の方法を齎し

たれば是より進んで彼等の意見信條の起り、確立する道を研究して見よう。

群衆の意見感情を決定する要素には遠因近因の二要素がある。

遠因的要素は群衆に或る確信を認容し又は絶對に之を反撥する力を與ふるもので、或る新思想が突如として萌芽を發する素地を作るものである。斯かる新思想は其の外觀は極めて自然的なるも、其の力と其の結果の重要なるは人をして驚愕せしむるのがある。或る思想が群衆の間に勃興し、實地に行はるゝの急速なる、疾風迅雷耳を掩ふに違あらざるものが度々あるが、是は單に皮相の結果であつて其の裏面には長時期に亘りて豫備的作用が行はれて居つたに違がないのである。

又近因的要素とは此の長期の豫備的作用が頂上に登り來りたるものである。

此の豫備的作用がなければ近因的要素があつても効果を奏しない。此の近因的要素は直接に群衆を勸奨して行動を起さしむる原因である。即ち思想に形式を與へて之を江湖に投出し、充分に其の効果を奏せしむるのである。會衆が或る決

議の爲め突然渦中に捲き去らるゝ杯は近因から起ることである。又群衆が突如として暴動を起すも、同盟罷工を決するも、多衆が政府顛覆の權力を一個人に賦與するも皆此の近因によるのである。

歴史上の大事件を調べて見れば、此の二種の要素は連続して作用を及ぼして居る。佛國革命の遠因は哲學者の著述、貴族の苛斂誅求、科學思想の進歩である。此の如き準備ある群衆の心意は雄辯家の演説、宮廷派の些細なる改革に對する抗拒の如き近因に依て直ちに煽動せらるゝのである。

遠因の中には凡ての群衆の信條や意見の暗流となつて居る一般的性質のものがある、人種、傳説、時、制度、及び教育など之である。是より進んで是等各要素の勢力を研究しよう。

第一節 人種

此の人種なる要素は他の孰れのものよりも重要であるから第一位に置かなけ

ればならない。吾人は既に他の著に於て此の問題を充分に論じたれば再び此處に論ずるの必要がない。前者に於て歴史的人種の何たるか、人種の特質が一度形成せらるゝや遺傳の法則の結果として非常なる權力を獲取し、其の信仰、制度、及び藝術——一言にして言へば其の文明の凡ての要素——は其の人種の精神の表現に過ぎざるものなることを示し、又一人種の權力の根柢は極めて深くして、最も深遠なる變化に遭遇せずしては其中の一要素も一人民より他の人民に移入するものにあらざることを示した。

四圍の状況、境遇、及び事件は一時の社會的暗示の要素にして、著しき勢力を有せるも若し人種の暗示、換言すれば一國民が代々の祖先より傳承せる暗示に相反する時は、其の勢力は必ず一時的に過ぎない。

吾人は本著の諸章に於て人種の勢力問題に再び論及し、此の勢力が極めて偉大にして、群衆の精神に特有なる性質を支配することを示す機會があるだらう。此の事實よりして國を異にする群衆は信條行爲に著しき相違あり、從て同一方

法を以て感化影響を與へ得べきにあらざる事を知るのである。

第二節 傳 說

傳説は過去の思想、必要、及び感情を顯はす。換言すれば人種の綜合であつて吾人に絶大の勢力を及ぼすものである。

發生學が過去の生活狀態が生物の進化に多大の影響を及ぼすことを示したる以來、生物に關する諸科學は全く一新した。此の觀念が益廣く普及する時は歴史の諸科學も之に劣らざる變化を受くるであらう。歎かはしきことには此考は未だ充分に普及して居ない。前世紀の學者は社會は過去と絶縁し、専ら理性の光に依て暗示されたる針路に於て、全然改造し得るものと信じて居たが、今日多數の政治家の意見は是より何等進歩して居る所がない。

一民族は過去に依て創造されたる有機體である、從て他の一切の有機體の如く徐々緩慢なる遺傳的蓄積に依てのみ變化し得べきものである。

人々を指導するものは傳説である、人が群衆の中にある時は殊にそうである。人々が容易く其の傳説に變化を及ぼし得るものは、單に其の名目と形式に過ぎない。此事は吾人の再三説いた所である。

此事は決して悲むべきことでない。國民的精神も文明も傳説なくして出来るものでない。故に人間が存在して以來の二つの大仕事は雑多の傳説を作ること、後に其の効果が消え失せたる時之を破壊するに努むることである。文明は傳説なくして出来ないが、進歩は傳説の破壊なくしては出来ない。唯難問題、實に非常なる難問題は、此の固定と變動との間に適當なる平衡を見出すことである。若し一民族が其の習慣を固定させると、最早變化すること出来ず支那に於ける如く改良不可能となる。激烈なる革命も此の場合には何の役に立たない。此際は連鎖の斷片が繋ぎ合はされて、過去が何等の變化なく再び權勢を握るか、又は斷片が其儘散亂して、無政府状態より直ちに朽敗次に至るの結果を生ずるのである。故に民族の理想としては、過去の諸制度を保持し單に冥々の中に少し宛之を

變化するのが一番良策である。所が此の理想の實現は非常に困難である。之を實現したのは古に於ては羅馬、近世に於ては英國あるのみである。

傳説的思想に頑強に執着し、之が變改に極力反對するのは群衆であつて、特殊の階級を構成せる群衆は殊にさうである。余は既に群衆の保守的精神を有せるを説き、最も激烈なる反亂も單に字句用語の變改に終るに過ぎざることを示した。前世紀の終りに於て破壊されたる教會、國外に放逐されたる又は斷頭臺に果敢なき最後を遂げたる僧侶を眼前に見たる時は、舊來の宗教思想が全く其の勢力を失墜したるものとは何人も思ひ得たる所なるが、未だ數年ならずして一度廢絶された公衆禮拜制度は一般の要求に從て復興されたのである。

茲に於てか一時屏息したる舊傳説は再び其の權力を揮ふに至つた。

是れ傳説が群衆の心意の上に多大の力を及ぼすを示す最も適切なる實例である。最も尊嚴なる偶像は社殿に住まず、最も專制なる君主は宮殿に占居しない、此の兩者は一瞬時に之を破壊し去ることを得るも、吾々の最も深奥なる心裡の

宮殿に君臨せる、眼に見えざる君主たる傳説は、一切の反抗も之を如何ともすること能はず、只幾百年の歳月を経て徐々消磨し去るを待つ外ないのである。

第三節 時

社會問題に於ても生物學上の問題に於けると同じく、時は最も有力なる要素の一である。時は唯一の眞正なる大創造者で唯一の大破壊者である。砂粒を堆積して山岳を作りたるも時なれば、太古の地質時代の極微なる細胞を發育せしめて威嚴ある人體を作り上げたるも時である。幾百年の星霜の作用は如何なる現象でも變化することが出来る。蟻にでも充分の時を與へたらモン、ブランの高峰をも平ぐべしと云ふは尤もなことである。變遷し行く時の魔力を思ふ儘に驅使し得るものは、宗教信者が神にありと信ぜる力を有するものである。

併し今茲には吾人は群衆の意見發生に及ぼす時の勢力を考究するに止めねばならぬ。此の觀察點から見ても時の作用は極めて偉大なるものである。人種と

云ふ如き大勢力も時に服従して居る、時がなければ此の如き勢力は成立しない。時は凡ての信條を生み之を成長せしめ又之を死せしむるのである。是等の信條が勢力を得るも亦勢力を失ふも皆時の助けに頼るのである。

群衆の意見信條を作るもの、或は少くも意見信條が發生すべき素地を作るものは特に時である。或時期に實現し得る思想が他の時期に實現し得ざるは之が爲めである。或る時代の觀念發生の素地を作る信條思想の宏大なる碎岩を堆積するものは時である。一時代の思想觀念は偶然に卒然と發生するものではない、其根は遠き過去に張られて居るのである。花を開く時でも開花の準備をするものは時である。故に其の發達を究めんとする時も探索の必要あるは過去である。一時代の思想は過去より生れたる息女にして將來の母であるが終始時の奴隷である。

故に時は吾々の眞正なる主人である、凡てのものを變化せしむるには只其の自由なる行動に任せれば充分である。現時に於ては吾人は民衆の益大望心を起

し、其結果として破壊動亂の來るべきを思ふて憂慮に堪へない。只時のみは他の力を借らないで平衡の恢復を圖るであらう。ラヴィツスの言つて居ることは尤なことである、曰く如何なる政體も一日には出來ない。政治的社會的組織は幾百年を要する事業である。封建制度が其の法規を發見する迄には、數百年間混沌紛雜の状態の下に存立したのである。又君主專制國が規律正しき政治制度を得る迄には、幾百年を要し其間は極端なる擾亂の中に過したのである。

第四節 政治的及び社會的の制度

制度は社會の缺點を救濟することを得、國民的進歩は制度政治の改善の結果なり、社會的變化は一片の勸諭を以て効果し得べしと、此考は今尙ほ一般に認容せられて居る考である。是れ實に佛國革命の出發點にして、現代の社會的理論も、亦此の基礎に立て居る。

久しく繼續したる經驗も此の重大なる誤謬を振ひ落すことが出來なかつた。

哲學者も歴史家も其の無稽なるを證明しようとなつたけれども何の甲斐もなかつた。併し彼等は制度が思想、感情、習慣の結果なること、思想、感情、習慣は法典を變改して變改し得べきものにあらざることは何の困難なく證明することが出來た。一國民が其の制度を隨意に選擇すること能はざるは毛髮や眼の色を勝手に選擇することが出來ない様なものである。制度や政體は人種の產出したるものである。時代を作るものでなく時代に作らるゝものである。國民は一時の出來心に依て支配さるべきものでなく、彼等の性格に準じて決定したる方針に依て支配さるゝものである。一個の政治的制度を作るには幾百年を要して居る。之を變更するにも亦幾百年を要する。制度は固有の價值を有するものでない。制度自體は惡しくもなければ善くもない。或時に或る國民に善良なる制度が、他の國民に對して極端に有害なる事もある。

加之國民は決して眞に其の制度を變更すべき力を有たない。勿論激烈なる革命の犠牲を拂つて其の名目を變更することは出來るも、其の心髓は依然とし

て變らない。名目は無益の看板である、事物の真相を穿つことを努むる歴史家は殆ど之に拘はる必要がない。例令ば英國は世界に於て最も民主的なるに拘らず、君主政治の下に存立し、西班牙亞米利加系の諸共和國は共和的憲法を有するに拘らず、最も壓制的なる專制主義が行はるゝは之が爲めである。國民の運命は其の性格に依て決せられ其の政體に依て決せらるゝものでない。余は前者に於て確實なる實例を擧げて此の意見を確立しようとなつた。

是に由て之を觀れば不自然なる憲法の製造に時を浪費するは、無智なる修辭家の兒戯に類する仕事にして無用の勞力である。若し吾人にして賢明にして、必要と時と言ふ二要素を妨げなく作用せしむれば、適當の憲法は自ら發展するのである。是れアングル、サクソン人種の採りたる政策にて、大歴史家マコーレーが此點に關して教へて居る一節は、羅典諸國の政治家の肝に銘じて忘る可らざる所である。彼は純粹なる理性の觀察點より見れば、不道理と矛盾の混亂せるものと見ゆる法律に依て、遂行し得べき凡ての善事を揭示したる後、羅典

人民の擾亂の中に投入せられたる幾多の憲法を取りて、之を英國の憲法と比較し、英國の憲法が直接の必要に迫られ一部々々徐々變更し、決して空理空想の産物にあらざることを示して居る。

「體裁の均齊を思はず主として便否を考ひ、變則を決して單に變則なりとの故に排除せず、弊害を感じたる時の外は決して革新を企てず、弊害を除く程度以上に革新せず、特殊の場合が條項の設定を必要とする範圍以上の提案を決して出さず、以上はジョン王の時代よりヴィクトリア女皇の治世に至る迄二百五十回の英國々會の議事を一般に指導したる規則なり」と言つて居る。

法律は如何なる程度迄各人種の必要の表現であるか、之が爲めに急激に變更することの出来ないものであるかを示すには、各國民の法律制度を一々取上げて吟味する必要がある。例令ば中央集權の利害に關して哲學的議論に耽るは出來ないことではない。併し吾人一度種々異なる人種より成る一國民が、此の中

中央集權に到達せん爲め一千年間の努力を要したるを見、又過去の諸制度破壊の目的を以て起りたる大革命が、此の中央集權を尊重せざる可らざりしのみならず、却て之を鞏固ならしめたるを思ふ時は、吾人は中央集權なる制度が緊切なる必要の結果にして、該國民存立の一要件たることを認め、之が破壊を云々する政治家の淺見を憐まざるを得ないのである。縱令偶然にして之を破壊し得るも彼等の成功は直ちに慘憺たる内亂の表象となるのみならず、舊時よりも遙かに壓制的なる新中央集權制度を齎らし來ることとなるのである。

前述の事柄よりして結論し得べきとは、民衆の精神に深き感化を及ぼす手段は制度の中に求む可らずと言ふことである。北米合衆國の如き國が民主制度の下に高度の繁榮を來たし、西班牙亞米利加系諸共和國が絶對に同じ民主制度の下に於て憫むべき無政府状態にあるを見る時は、吾人は是等の制度なるものが一國の偉大を來すに無關係なる如く他國の衰微にも何の關係なきことを認むることが出来る。國民は其の性格に従て統治せらるべきもので、此の性格に合致する

制度でなければ損料借の衣服、一時的の假裝の如きものである。諸聖徒の遺物の如く人間に幸福を與ふる魔力を有すと思はるゝ制度を來さん爲め、過去に於て慘憺たる戦争行はれ激烈なる革命が企圖された。今後も尙ほ斯かることが行はるゝであらう。果して然らば制度は斯かる動亂を起す故に、或る意味に於て制度は群衆の心意に反動を起すと言ひ得るやうであるが、實際に於ては群衆の心意に反動を起すものは制度ではない。成功しても失敗しても制度自體は何の價値を有たないことは吾人の知て居る通りである。群衆の心意に影響を及ぼすものは幻想と言辭、殊に言辭である。言辭は空想的なだけ力強きものである。如何に驚くべき力を有するものであるかは間もなく後章に論證しようと思ふ。

第五節 教育

現代に行はるゝ諸思想中最も勢力あるものは教育は著しく人物を變化することが出来る、教育は必然に人物を改善し彼等を平等にさへすることが出来ること

言ふ考である。此説は絶えず繰返へさるゝと言ふ丈けの事實で、最も堅實なる民主的獨斷説の一となつて仕舞つた。今此説を攻撃するの困難なるは、往時教會の獨斷説を攻撃するの困難であつたと同様である。

併し此點に就ては多くの他の點に於けると同じく、民主的思想は心理及び經驗の結果とは全く背反して居る。ハーバート、スペンサーを始め多くの知名の哲學者は教育は人を一層道德的にもしなければ幸福にもしない、教育は人の本能も變じなければ遺傳的慾情をも變じない。若し又指導宜しきを得ない時は有用なるよりも寧ろ有害なることがあることを示して居る。統計學者は是等の意見の間違なきことを證言して得る。統計の示す所に據ると教育の普及、少くも或種の教育の普及と共に犯罪は増加し、社會最惡の敵たる無政府主義者は學校の優等生より出て居る。名聲ある役員たるアドルフ、ギロー氏は其の近著に於て現今に於て無學の犯罪者數一千人に對し、教育ある犯罪者三千人あり、五十年間に於て犯罪者の割合は人口十萬人に對し、二百二十七人より五百五十二人

に増加し。十三割三分方の増加を來したることを示して居る。氏は又其の同僚と共に佛蘭西に於ては少年に年期奉公の代りに無料の義務教育を施す様になりたるが、犯罪は特に是等少年間に増加したることを示して居る。

指導宜しきを得たる教育は、縦令道德の標準を高むることなしとするも、少くも職業的能力を發達せしむるとの意味に於て、甚だ有用なる實際的結果を與へないとは決して言ふことは出來ない。又何人も此の如く主張したものはない。不幸にして羅典民族は、殊に最近二十五年間は、教育制度を誤りたる主義の上に立てアレアル、ワユステル・ヅ・クランジェ、テーヌ等の如き最も知名なる人士の意見ありたるに拘らず嘆くべき誤謬を固持して改めない。余は以前發表したる一著述に於て、佛蘭西の教育制度は教育を受けたる者の多數を化して社會の敵と爲し、最惡なる形式の社會主義の子弟を多數社會に送り出すことを示した。此の教育制度——之を羅典的と形容するはよく當つて居る——の第一の危険は、教科書を暗誦すれば智慧が發達すると思ふて居る根本的心理學上の誤謬に

陥つて居る點にある。當局は此の謬見を懐いて出来る丈け多くの書物の上の智識を與へようと努め、始めて小學校に入りたる時より大學卒業に至る迄青年は只管書籍を暗誦するを以て能事終れりと爲し、自己の判断や自發的工夫力を働かすことは夢にもしない。教育とは彼に取ては暗誦と服従である。

前文部卿ジュール、シモン氏曰く課業を學び文法や學科の要領を暗誦し、克く摸倣反覆するは笑ふべき教育法で、此の如き教育の一切の努力は、教師の過誤なきを默認せる信仰の行爲で、其の結果は吾人を小さくし吾人を無力ならしむるものであると。

若し此教育が單に無用なるに止まらば、吾人は小學校に於て必要な事を教へられずしてクロテールの血統や、ノイストリアとアウストレーシアの衝突や、動物學的分類やを教へらるゝ、兒童に同情を表するに留まることであるが、此の教育制度には更に重大なる危険があるのである。此教育制度の下で教育を受けた者は自己が生れた生活状態を嫌厭し之より遁れ出でんとを熱望する。労働者は

最早労働者たるに甘ぜず、農夫は農夫の生活を繼續することを願はず、中流社會の最も微賤なるものでも、其子弟には國家より俸給を受くる官吏以外に職業がないと思ふに至る。佛蘭西の學校は人生に適する様に學生に準備を與ふるにあらずして、専ら官吏となる準備を與へる。官界で成功するには自尊自治の材、個人的自發的工夫能力は毫末も必要がない。此の教育制度は社會の下層には自己の運命に不平を懷き、折もあらば反抗の氣勢を揚げんとする賤民の大群を出し、又上層には懷疑輕信の矛盾せる性質を同時に有し、國家に對して迷信を懷き之を一種の天道と見做しながら而も絶えず之に敵意を表し、自己の過失を政府に歸し、而かも官憲の關涉なくしては些細の企業も爲し得ざる輕佻浮薄の市民階級を作つて居る。

教科書に依て免狀を有する人々を作る國家は其中の少數者を利用し得るのみにて他は職に就くことが出来ない。其の結果國家は職に就ける少數者を給養し、無職者を敵としなければならぬ。社會的ピラミットの絶頂より最下層に至る

迄、微賤なる書記より教授や知事に至る迄、免狀所有を誇りとせる求職者の爲めに圍繞せらる。或る實業家が殖民地に代理を置かんとするも其の希望者なきに困り居る際、數千人の志願者は些細なる官職を得んことに熱中して居る。セーヌ州一州だけでも無職の小學教師女教師は二萬人も居る。是等の人々は皆農場や工場で働くことを嫌ひ國家に頼て生計しようとするのである。選抜採用せらるるもの數には制限があるので不平者の數は極めて多きを免れない。是等不平者は其の首領の何人たると目的の何たるかは問ふ所でない。折あらば革命に投ぜんと待ち構ひて居る。利用の方法のない知識を與ふるは人を驅て反亂に走らしむる確實なる方法である。

今にして昨非を覺るも時既に遅い。獨り諸國民最高の教育者たる經驗は骨折りて吾人に吾人の過失を示すであらう。忌むべき教科書と嘆かはしき試験を廢し、之に代ふるに實業教育を以てし、吾が國の青年をして彼等が今日百方回避せんとして居る農場工場及び植民地の事業に立歸らしむるの必要を證明し得る

力あるものは、經驗を通じて他に求むることが出来ない。

今日に於て凡ての識者が要求して居る職業教育は、吾人の祖先が過去に於て受けたる教育である。此の教育法は其の意志の力、獨創力及び企業的精神に依て世界を支配する諸國民間に今日に於ても尙ほ盛に行はれて居る。大思想家テノ又は佛國往時の教育法は今日英米に行はるゝ教育法と近似せることを示し、教育法の結果を明かに指示して居る、尙ほ後に於て其の主要なる數節を引用する積りである。

若し若干の知識を皮相的に獲得し、若干の教科書を暗誦して智慧の標準を高め得べくば、古典的教育が縱令不平を懷ける人々及び、其の身分に安住の出來ざる人々のみを出すも尙ほ其の不利を忍び得るであらう。果して標準を高むるであらうか。遺憾ながら否と言ふ外ない。實世間に於ける成功の要件は判斷力、經驗、自發力及び人格を有するにある。所が此等の性質は書籍の與ふる所でない。書籍は字典である、参照には有益であるが之を相應に腦裡に押し込んだ所で何

の益もないものである。

職業教育に依て古典教育の及ばざる程度に智慧を與ふるは如何にして出来るか。テーヌは此點を明示して曰く。

「觀念は自然的にして常態なる周圍に於て形成せらるゝのみである。之が生長を助くるものは青年が工場、鑛山、法廷、書齋、建築場、病院に於て、或は道具や材料や作業を見て、或は顧客、職工に面し、或は巧妙なる又は拙劣なる、高價なる又は有利なる仕事を見るに際し日々官能に受くる無數の印象である。此の如くして眼や耳や、手より來る微細の感覺は——嗅覺さへ——獲得せらるるものであるが、是等の感覺は無意識に收拾せられ、冥々の裡に精製され、學修者の心裏に於て一定の形式を作り、早晚彼等に新たなる結合や、單簡法や、經濟や、改良や、及び發明に關する暗示を與へるのである。佛蘭西の青年は彼等の感覺が最も鋭敏なる年齢に於て、最も貴重なる實世間との接觸の機會と、此の同化に必要な凡ての要素を奪ひ去らる。終りの七八ヶ年間は學校の中に閉ぢ込

められ、彼等に人間や事物の精確なる觀念を與へ、是等を取扱ふ種々なる方法を知らしむる直接なる個人的經驗より隔離せられて仕舞ふ。」

「……少くも十中九人は、一生涯中最も大切な數ヶ年間を通じ勞力と時間を空費する。是等の中には第一出で、試験に應ずる者の半數或は三分の二がある。是等は落第者である。次で成功して學位、證狀、免狀を得る者の半數或は三分の二がある。是等は過度の勉強を爲した者である。彼等は實に過大の要求を負はされたものである。即ち彼等は一定の日に椅子に腰を掛け或は黒板の前に立ち二時間も引續き多數の學科に關して人間知識の生ける倉庫とならねばならぬ。實際彼等は當日二時間は生ける倉庫又は殆ど之に近いものになるが、一ヶ月經過すれば舊に還へるのである。而して此時は再び試験に成功するのは到底出来ない。彼等の餘りに多く餘りに重く蓄積された知識は絶えず彼等の心裡から滑り抜けて之に代るものがない。彼等の心意の力は衰へ、彼等の豊饒なる生長力は枯渴し、發達の極點に達した時は精力の消耗し盡した人となり了るのである。

定職に落着き、結婚し、一定の圈内、永久に一定の圈内に離離りて彼は限られたる職業に身を委ね、其の職掌は完全に盡すも其れ以外何事も爲すことが出来ない。此の如きものが彼等の得る收穫である。是れ確かに得る所失ふ所を償はざるものである。英國及び米國に於ては一七八九年以前の佛國の如く、前述のものと反對の方法を取つたが佛國と同等又は其れ以上の結果を收めた。

此の有名なる心理學者は次で佛國の教育制度とアングロ、サクソンの教育制度との差異を示して居るが、アングロ、サクソンの教育制度には佛國に於て見る如き無数の特別學校がない、彼等の教育は書籍の學習でなく實物教育である。例令ば技師は工場で練磨され決して學校で練磨されない。此の方法は各人をして其の智力の許す限りの程度に到達せしむるものである。若し本人の天分が職工又は職工長相應なれば之になり。若し更に其れ以上に進むべき技能あれば技師となることが出来る。一個人の全生涯を十九歳か二十歳の時に受くる數時間の試験に依て決するよりは、此の方法は遙かに民主的にして社會に取て利益ある

方法である。テーヌ曰く

「學生が病院に於て、鑛山に於て、工場に於て、建築家の事務所に於て、或は法律家の事務所に於て極めて年少の時より業務に就き、一段々と見習奉公を果たし行くのは、丁度佛蘭西に於て法律書生が法律家の事務所に學び、美術家が習作室に於て爲す所と大に似て居る。彼等は豫め實際の業務の開始に先だち若干の一般的概括的教育を受くるの機會を有せるを以て、近く着手せんとする觀察を蓄積する基礎は既に出來て居る。尙又彼等は一般に閑暇を利用して種々の専門的科目を修むることが出来る故に、日常の經驗を一步々之に合致させて行くことが出来る。此の如き教育制度の下に於ては實際上の技倆は學生の能力に正比例して進歩し、將來取るべき仕事及び今より自己を之に適合せしめんと欲する特殊の仕事に必要な方向に發達するのである。英米に於ては青年は此の方法に依て直ちに自己の技倆を最大程度に發達せしむることが出来る。二十五歳に於て、若し材料と才能があれば尙ほ若年にても、有用なる技術家となり得る

のみならず、又自發的に如何なる企業も出来る。彼は機械の一部分たるのみならず機械を動かす原動力である。之と反對の教育制度の行はるゝ——一代々々と益支那と同列に入りつゝある佛國——にありては浪費せらるゝ努力の總額は實に莫大なものである。」

此の大哲學者は羅典教育制度と實際生活の要求とが益々相背反し行くに關して次の如き結論に達して居る曰く。

「兒童期少年期青年期の教育上の三段階に於て學校教室に於ける書籍に依る理論的教育的準備は期間長きに失し負擔重きに過ぐ。是れ試験、學位、免狀、證狀のみを貴重し、最悪の方法を用ゐ、不自然的非社會的教育方針を適用し、實際的見習を過度に延期し、寄宿制度に依り、人工的訓練と機械的詰込主義に依り、過勞的勉學に依りて教育を施し、聽て來るべき時代を顧慮せず、成年期や人間としての職分に意を致さず、青年が聽て投げ入れらるべき實世間の如何なるべきかを思はず、吾人が其中に活動し之に適應し之に身を委ぬる様に豫め教

練せられざる可からざる社會を無視し、人類の從事すべき生存競争、此の生存競争場裡に於て自家を防禦し立脚地を保持せんとせば、青年は豫め準備、武裝、訓練を與へられ、堅固なる精神を與へられざる可からざる事實を眼中に置かざる爲めである。此の缺く可らざる準備、此の何物よりも重要な藝能、此の堅實なる常識、神經及び意志の力は、佛國學校の青年に供給せざる所で、却て彼に實生活に入るべき資格を與へずして寧ろ此の資格を剝ぎ取て居る。故に青年の愈實社會に入り活動世界に第一步を踏み入るゝや往々痛ましき失敗を重ねるのみで、其結果長く傷痕を残し、時としては生涯復た立ち得ざるとなる。此の試練は餘りに嚴酷にして危険である。其間に智力的及び道德的の釣衡破れ、或は回復し得ざる危険に陥る。是れ蓋し迷夢一時に覺め、半生の謬想深かりし丈け失望餘りに大なるに因るのである。

以上の論述は群衆心理問題外に脱出したる如く思はるゝも決してそうでない。若し吾人にして今日民衆の間に發芽し、明日地上に跳出せんとする觀念信仰

を了解せんと欲せば、其の發芽すべき土壤の如何を知るの必要がある。一國の青年に與へられたる教育は其國の將來を知るべき知識を與へる。現代に與へらるる教育を見れば、前途に對して悲觀説を懷くも當然である。民衆の精神が高上するも墮落するも一部分は教育に原因する。故に此の民衆の精神が現行の教育制度に依て如何に形成せられたるか、又無頓着中立なりし民衆が、如何にして進んで空想家及び修辭家の暗示に従はんとする不平の徒となりたるかを示すは極めて必要のとである。今日社會主義や無政府主義の發見せられ、羅典民族を墮落の時期に近かしむる道を用意して居るものは學校の教室である。

群衆心理上終

大正三年四月二十二日印刷
大正三年四月二十五日發行

(定價金拾錢)
(郵稅金貳錢)

ア カ ギ 叢 書
第 四 編
群 衆 心 理

著 者 葛西又次郎
發行者 赤城正藏
印刷者 中田福三郎
印刷所 秀英舎第一工場

發兌元
賣捌所

東京市麹町區三番町五〇
電話番町二二八〇番
振替口座東京一〇四三二

全國各書林
赤城正藏

アカギ叢書

毎月十篇
内外刊行

〔定價金拾錢〕
〔郵稅各貳錢〕

- 一 歐洲イブセン原作 **人形の家** 一名
- 二 哲學 村上靜人編 **プラグマチズム**
- 三 歐洲 中島文學士著 **ダヌンチオの女性**
- 四 社會 日野月 演劇に現れたる **群衆心理**
- 五 歐洲 葛ル西文學士編 **痴人**
- 六 歐洲 中村文學士編 **ウエデと其著作**
- 七 哲學 三浦文學士編 **ベルグソンの哲學**
- 八 歐洲 中島文學士著 **サロメ**
- 九 哲學 村上靜人編 **進化論**
- 十 博物 寺尾理學士編 **新聞記者**
- 十一 日本 龍居文學士著 **江戸の世態**
- 十二 歐洲 曹藤文學士譯 **喜劇**

特色

- (一) 科學文藝より粹を抜き英を取り紳士の標準智識たるを期す
- (二) 廉價、簡明、平易に解説して天下に讀み難きもの無からしむ
- (三) 名著の紹介は簡にしてその精髓を失はず

274
999

終

